〈第4回国際日本学講演会（2021年12月18日）講演記録〉

もう一つの天草くずれ：天草キリスト教史序説[1]
―信仰と生業―

熊本大学名誉教授　鶴　島　博　和

はじめに

天草西目筋の大江、崎津、今富そして高浜で、5205名という数のキリシタンが、1805年（文化2年）に摘発された。なぜ、この時期に、それも西目筋なのか。これが本稿の目的である[2]。

これまで、この問題は、キリシタンの「カクレ」あるいは「潜伏」という側面が強調されすぎ[3]、弾圧に耐えて信仰を守り通したという、証明の難しいシナリオがまかり通ってきた。それで、ここでは、「カクレ」あるいは「潜伏」という言葉は使用せず、キリシタンあるいは古キリシタンとする。そこには、キリスト教の日本的異端*の意味がこめられている。但し、「隠れ」や「潜伏」の用語を否定するものではない。彼らはどう信仰を守り通したかを、「くずれ」を検証するなかで明らかにし、天草キリスト教史、それも教会史という個別史学ではなく全体史としてのそれへの「導きの糸」（作業仮説）としたい。

そこで、「天草」そして「くずれ」の意味からはじめる。

＊神への執りなしの専門職である聖職者の存在しない「日本的異端」をキリシタンとして、世界中におけるキリスト教史全体の中に位置づけてみたいという一つの試みである。しかし、あくまでも一つの試論であり、一般的使用を強調するものではない。また引用した史料でのキリシタンという用語には変更を加えていない。

(1)　天草とはどこか

天草には二つの使い方がある。ひとつは、島嶼としての天草。もう一つは、歴史の中で、とくに中国的、海域アジア史的視点の天草である。本報告で問題とするのは後者である。＊尚、イエズス会の書簡では天草はMacusaと表記されることがある（後述付録3）。

16世紀の中国や南蛮伴天連の使用した「亜麻国撒」とは河内浦、即ち天草氏の領地をさす[4]。天

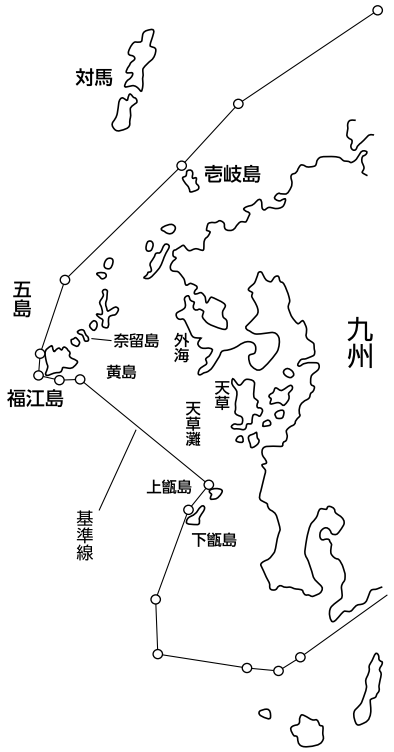


図1　海域九州と天草灘

＊実線が基線　「海の情報」（海上保安庁）をベースに筆者作成。

草氏の領地は、布教以前の1560年代までには、宮地氏と久玉氏の領地を合わせて、天草氏の本領で後の「一町田組」となる領域と後の「大江組」となる領域に、旧宮地氏領と旧久玉氏領を合わせたものとなった。世界システム論的な発想で言えば、「一町田組」領域が中核、「大江組」領域が半周辺、それ以外が周辺という権力構造体を構成したことになる。この構造が、キリスト教の布教とその組織化に大きな影響を与えた。（図2参照）

(2) くずれと何か

「崩れ」とは、キリスト教徒の大量検挙よって非合法組織が崩壊状態になった事件と定義する。この定義に従うと、主要な「崩れ」は、島原・天草一揆の後に発生した1657年（明暦3年）の長崎大村の郡崩れ、1660年（万治3年）の豊後崩れ、1661年（寛文元年）の濃尾崩れの、短期間に集中的に発生した三件である。1790年（寛政2年）から1868年（明治元年）までに発生した浦上一番から四番、天草、そして五島のくずれは、必ずしも組織が崩壊状態には至らなかったということで、これまでの学問的習慣を考慮して「くずれ」という音を残すも、差別化のためにひらがなで表記する。「崩れ」とひらがなの「くずれ」の間には大きな違いがあり、前者は、幕府の直接介入によって大量の処刑者を生み出し、さらには寺請制度と人別改めという、仏教のいわば国教化と住民の戸籍登録制度化を加速させた「国家」構造そのものに影響を与えた異教取り締まりである。これに対して、「くずれ」は、浦上一番からは、浦上三番など取り調べの過程で死者がでることはあっても、地元で審理され処刑はされず詫び状程度の異端取り締まりである[5]。幕府はこれらを「異宗」事件としてキリスト教の存在を強調していない。浦上四番と五島のくずれは、いわゆる「信徒発見」の後の、キリスト教徒の自己主張の結果発生した事件で、ヨーロッパとカトリックとの関係で明治新政府が対応したキリスト教徒対応策なのでここでは割愛する。

(3) 天草灘

天草灘は、九州西岸の長崎県南部・熊本県西部・鹿児島県北西部に跨る海域であり、天草下島西方に分布する大陸棚とその縁辺にあたる海域（沿岸漁業域）で、五島福江島南東の黄島と甑島列島の上甑島の間に基線が設定されている。これより北東側は海洋法上日本の内水（内海）とみなされ、この基線から南西側12海里（約22.2km）までが日本の領海となる。天草灘と隣接する五島灘の海域九州こそ、古キリシタンの舞台であった。

＊時系列をわかりやすくするために西暦と（元号）を併記したが、月日は日暦である。

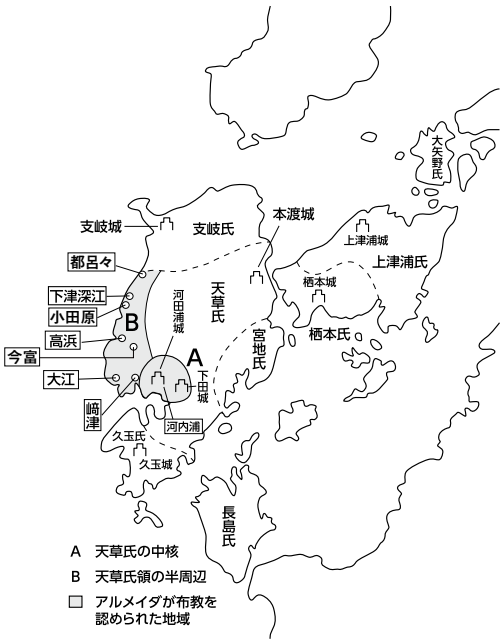


図2 天草五人衆の推定領地と天草氏領の構造

＊宮地氏と久玉氏は天草氏に、長島は島津氏に併合される。原図は中山圭「海の領主「天草五人衆」と天草へのキリシタン伝来」『天草―祈りの原点とキリシタン文化―』（西南学院大学、2019年）、pp. 39-41, at p. 40.

1．天草への布教と信仰組織

(1)　布教

1560年（永禄3年）、上津浦氏と栖本氏の抗争で[6]、上津浦に組した有馬純忠の依頼を受けて平戸の松浦隆信は20人の鉄砲衆を派遣した。史料的に確認できる九州での最初の鉄砲使用である。この鉄砲衆は天草河内浦に定住したと思われる（後述）。鉄砲の威力をみて、まずは1563年（永禄6年）10月10日に天草鎮尚は宣教師の派遣を打診したといわれる[7]。結局1566年9月、志岐麟泉の要請に応じてルイス・デ・アルメイダが天草での布教を開始したが、港が南蛮（ナウ）船の係留に不十分ということ、貿易が伸展しないことで、布教は中断した[8]。本格的な布教は天草氏領で始まった。

1569年2月23日、アルメイダは天草氏の居城河内浦に到着して布教の橋頭保を確保した。港と教会相当施設である。アルメイダは崎津を港とした[9]。しかし、このときアルメイダを招聘したのは、領主天草鎮尚ではなく、天草河内浦に定住し1560年に活躍した鉄砲衆の長で、イエズス会側がこの地の指導者（regedor）とよぶドン・リアン[10]であった（付録2）。リアンという洗礼名をもつキリスト教徒あるいは受洗を望むキリスト教親派が、宣教師を呼んだのである。布教の前に河内浦にはそういう人がいた。「指導者」という言い方は、何らかの理由で布教先にいて、キリスト教化に協力した俗人、個人あるいは集団で、イエズス会の布教の方策であったという可能性を指摘しておく[11]。

アルメイダは鎮尚の館の側にある寺に（現崇円寺）に宿泊した。しかし、アルメイダが鎮尚に対面するまで20日（史料2では2ヶ月）かかった。やっとの対面の場で、アルメイダは教会の建設、志岐までの西目筋の海岸線、河内浦、崎津、今富、大江、高浜、小田床そして都呂々までの7レグア（35km）をその布教の範囲することを始めとした五つの要求を出し、認められた。アルメイダが鎮尚と会うまで、これほど時間がかかったのは、布教を進めたいドン・リアンと、反対する、鎮尚の二人の兄弟（大和守、刑部大輔）や鎮尚の妻そして僧侶との間に衝突が発生していたためである。そのため、鎮尚は一歩を踏み出せなかった。アルメイダが観察したように、鎮尚の権力は、小さな城に跋扈する土豪連合の調整力に依存していた。

布教が認められて、アルメイダは、最初に、布教を勧めた地域指導者（regedor de tota suas terra）ドン・リアンとその世帯50人（当時の世帯構造がわかる：後述）に受洗あるいは堅信礼を授け、そのあと彼の「義父が120名の人と鎮尚の家臣の多数を伴って受洗した」。その後、アルメイダは、一町田の本村の郊外（おそらくはリアンの所領とその近辺）に歩いて出かけ布教を開始し、400人を受洗した。アルメイダは、このときドン・リア

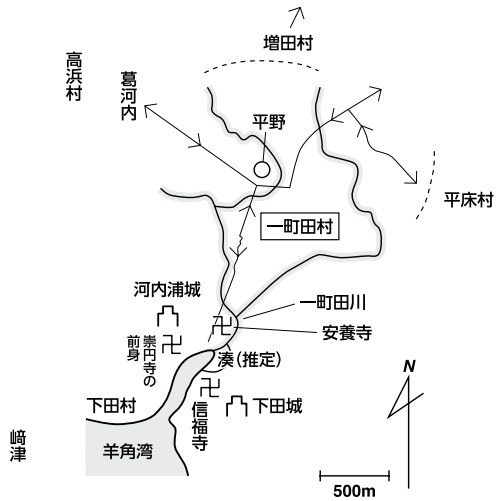


図3　河内浦騒動（概念図）

＊リアンの家は、一町田村の郊外（村内）にあり、反対派の拠点が南の下田城―旧信福寺であることから、北に位置していたであろう。彼の居館が砦に近い防御施設であることから、葛河内を経て高浜へ行く往還と、平床、市ノ瀬へ方面の往還の三叉路の上の丘を想定している。ここは、鶴田文史氏が一町田組大庄屋平野家の邸宅と推定した場所でもある。現在の状況をみても700坪はくだらない。ただし、これはあくまでも推定である。

ンの助けがなかったらできなかった、と独白している。リアンが布教の下準備をしていて、そこで布教が始まったのであろう。

布教が進み始めると、反対派は、700名の武装兵を率いて某寺院（旧信福寺：大和守は当時の信福寺の傍の下田城の鎮守）に集まった。そして、鎮尚に使者を送り、キリスト教徒を殺害することを知らせた。鎮尚はこれを認めず、リアンに事態を知らせた。彼はリアン寄りの調停者に徹していた。リアンの対応は素早くキリスト教徒を集めたという。彼らは最上の服を着てリアンのために死ぬ覚悟ができていると言って彼の家に集まった。彼らは昨日今日のにわかキリスト教徒というより、リアンの庇護下にあって、キリスト教的教えを聞いていたものではないだろうか。

史料1

1569年10月21日付（日田発）『アルメイダ書簡』

「私（アルメイダ）は天草の領主（天草鎮尚）のもとに赴いた。...彼の館（河内浦城）の側にある一寺院（崇円寺？）に私を泊まらせた。20日が経過して...私は挨拶した後...5つの事を求めた。...第四は教会を建てるため、その用地を与えること。第五は同地（河内浦）よりに志岐に至るまでの沿岸七レグア（約35km)の海岸にキリシタンになることを許す御触れを出すこと。...最初の受洗者は同地一帯の執政官（指導者；助言を与える有力者）（ドン・リアン）と、その家族（世帯）およそ50名であり...次いで、彼の義父が約120人と殿の家臣を多数伴って受洗した。...領内の仏僧...殿の二人の兄弟は...ある晩...700名の武装兵を率いて某寺院（信福寺？）に集まった。これは夜明けとともにリアンの家を襲って彼を殺し、その義父は、はなはだ重立った者が故にこれを殺すためであった。彼らは...まず殿に使者を送り...承認すべきことを伝えさせた。これに対して、殿は...直ちにドン・リアンに使者を遣わして事態を知らせた。...ドン・リアンは、600名の武装した人々を擁し、鉄砲用の銃眼を備えた桶職人による大きな柵を造っていた（tinha Leao seis cent homens darmas, & tinha feito grandes tranquerias de tanoado com suas seteiras pera as espingardas）...反対者たちは、...殿のもとに行き、殿がリアンに平和のためしばらく（国から）去るよう勧告すること（を求めた）。国主は彼にこの勧告を行い、彼（ドン・リアン）は妻子と約50人の家臣を伴って、所有していた大船に乗り立ち去った…（口之津で）追放された彼の義父とともに滞在している。」

＊基本的には松田毅一監訳を使用したが、本文の訳と若干異なる所もある。（　　）内は、筆者による補足あるいは修正。下線は筆者。以下同じ。

史料2

1569年8月15日付書簡（Anonymous イエズス会宛）

「四旬節に...大村からおよそ15里（レグア）*の天草に到着すると...修道士（アルメイダ）が彼のために用意された殿の町の一寺院に宿泊してから二ヶ月が経過した...殿は彼が求めていることを承諾した。...執政官（指導者）（ドン・リアン）が人々の頭に就くためキリシタンとなることであり...悪魔は動き出し、前述の状況を見てこれを妨害することにした。というのもドン・リアンと称する執政官（指導者）が（一町田村の）内陸部の所領（平野とその北の彼の拠点？）をことごとくキリシタンにするため尽力していたからである。...殿の兄弟は...幾日も前からリアンと敵対しており、諸人がキリシタンになるのを見（て）、リアンがその頭として権勢を徐々に加えつつあったため、ドン・リアンを殺すことを決意した...五月に始まり、ルイス（アルメイダ）修道士が大村に発った八月十七日まで続いた件の騒乱においては、人々から求められても彼は一人としてキリシタンにすることはなかった。それはリアンが去った後、諸事が未定の状態だったからである。修道士は求めていた新たな協定に殿が同意するよう...以上のことがすべて認められ、協議が整うと、（アルメイダ）

修道士は（鎮尚）殿に会いに行き、私は彼に伴ったが、大いに歓迎された。我らは彼の家（河内浦城）で午餐をとった後、教会（河内浦教会：崇円寺の前身の地）に戻った。殿はさっそく、教会を訪ね（城と教会にした寺は近距離）、別れを告げ…我らは騒乱が起きる前に修道士が幾日か滞在していた港（崎津）に向かった。彼（アルメイダ）は殿の町（河内浦：一町田）における改宗作業を終えたので、改宗者にドチリナ（キリシタン：キリスト教の教義）を教え、連祷を唱える人を教会に残し、（アルメイダ）修道士自らは、港（崎津）に赴いて、その周辺にある数カ所の集落をキリシタンにするため殿が建てた教会に至った（崎津教会）。同港は彼の宿泊地から一レグアの所にある。これをすべて終えた後の八月十七日、修道士は以上の事柄をコメス・デ・トルレス氏に報告するために大村に向けたった。」[12]

＊レグア（legua）：レグアはローマ時代から使用された長さの単位、ほぼ人間の一時間の歩行距離に相当する。時代と場所で違いがあり、ポルトガルでも4.4kmから6.2kmの幅がある。Metric Leguaは5km。現在の崇円寺から崎津教会まで陸路で約8㎞、海路ではそれよりも短くなる。修道士たちが海路を利用していれば、1リーグは正確な距離であろう。

僧侶が偵察でドン・リアンの屋敷に赴いたが、そこには武装した600人がいて、鉄砲用の銃眼を備えた防御柵があった。彼の家は、まさに要塞であった。ドン・リアンは、1560年に松浦隆信が派遣した鉄砲衆の頭で、彼は河内浦の有力者の娘と結婚して定住してこの地に落ちついたという推定はここを根拠としている（さらなる根拠は後述）。この武装は、武人のそれである。結局、鎮尚が仲裁に入り、ドン・リアンと世帯50名は、「所有していた大船に乗り」、一時、口之津へ退去した。リアンは大型船を所有する武装海民であった[13]。

イエズス会の布教は、鉄砲やその他のヨーロッパの文物を南蛮交易によって得たいという領主層の物欲から説明されることが多かった。1560年の志岐麟泉の行為はその点から説明できるのかもしれない[14]。しかし、そこには、一向宗のような、救いを求めたいという[15]、より主体的な信徒の共同体的結合があることを見落とすことはできない。医療、施し、孤児の世話といった、決して十分ではないにしても萌芽的な福祉（互助）という側面を忘れることはできないのではないだろうか。一向宗が受容されたようにキリスト教の受容は日本社会の変質のなかで検討されねばならない課題であろう。

イエズス会の布教は、領主の物欲を糸口に推し進められただけではない。彼らは、特定地域に布教に赴く前に、その土地の何らかの理由でキリスト教徒になった者、あるいは祝福を求める者を「その地の指導者（regedor）」として、下準備をしてもらったうえで、布教に入ったのであろう。前述の郊外の受洗でのリアンの役割、史料2（付録3）で修道士某が記録しているアルメイダの鎮尚への要求に、指導者即ちリアンが人々の頭に就くため「キリシタンとなること」ことなどからそう言えるだろう。アルメイダは教会員とその代表の組織化（コンフラリア）を意識していた。

リアンが退去した後、騒ぎは終息したかに見えた。しかしアルメイダは、崎津で布教を行い緊張を高めた。一方で、リアンという後ろ盾を失った鎮尚は、盟主大友義鎮（宗麟）を頼り、彼に布教を認めてもらう書状を出してもらいそれを家臣に見せて自己を正当化した。しかし、それに対して、大和守や刑部大輔たちは、島津や相良と連絡を取りあい対抗した。河内浦の宗教対立は、背後に、九州の戦国大名の抗争を控えた「河内浦合戦」の様相を呈してきたのである。

その間、アルメイダは、報告のため崎津から大村へ発った。彼や修道士某の書簡から最初の布教施設の状況がわかる。まず、鎮尚が布教を認めた最初の地域、河内浦から西目筋、志岐氏との境のおそらく都呂々手前までが鎮尚の本領で、その中心として河内浦城の傍に教会があり、そこから船で1リーグ（5km）程度の所の崎津にもう一つの

教会があった。この二つの教会がその後のキリスト教展開の中心となった。本領において核となる河内浦教会と、本領でも半周辺の入り口の崎津教会である。

そして忘れてはならないのは、天草氏領のキリスト教布教は、志岐も含めて、天草の他の地域のそれとことなり、領主による上からの布教というよりも、下からの、信徒集団の形成、つまりコンフラリアをその母体とする、布教形態をとったことである。アルメイダは、すでに1557年に豊後府内で「慈悲の聖なる家」(Santa Casa de Misericordia)というコンフラリアを組織していて、その手筈は心得ていたであろう。この点は繰り返して述べたい。

騒ぎのなか、鎮尚は本渡城に避難したが、大友宗麟や口之津から移動してきたリアンたちの援助もあり、1571年までに河内浦城を奪取し長子久種とともに受洗し、天草氏本領（中核と半周辺）のキリスト教化の方向が定まった。1571年9月22日付のカブラル書簡では河内浦の一向宗の指導的僧侶が信仰を受け入れたという。アルメイダの布教の前から、河内浦には、一向宗の寺があり門徒を抱えていたと推測される。リアンやアルメイダが門徒を取り込んだことが宣教や布教が進んだ理由の一つであろうし、多くの門徒がキリスト教徒になることで、僧侶も信仰を受け入れたのであろう。最初から天草のキリスト教は一向宗とのシンクレティズムの関係にあった[16]。

史料3

1571年9月22日付書簡（フランシスコ・カブラル師が口之津よりマラッカ学院某司祭に宛てた書簡）

「私は目下、ルイス・デ・アルメイダ修道士と日本人修道士ヴィンセンテを伴って訪れた天草に留まっている...我らが最初に到着した場所は本渡（Fondo）の城で、ここは彼（天草鎮尚）の家臣である一領主に属しており、彼は同所で我々を待ち受けていた。...浜からおよそファルコン砲一射程の所にある城まで...我らは仏僧らの僧院であるヴァレラ（varella：異教の寺院）で歓待を受けたが、そのためにすでに本堂から偶像を取り出しており、我らが代わりに留まった。...この地の指導者たち（regedores do lugar）が我らの来訪につき祝辞を述べ...件の領主（天草鎮尚)が常に居住している（していた？）他の城（河内浦城）に赴いた。かの悪しき領主が数人の仏僧とともに我らを妨害するので、同城で何も行えぬまま二、三ヵ月滞在した後...殿は城の大半の人々、その他を伴ってキリシタンとなり、これに続いて多数の村々がキリシタンになった。彼らに混じって、当地の一向宗の頭にして偉大な説教者であった仏僧がキリシタンになった。(Entre estes se fez Christãno hum Bonzo que nesta terra era grande pregador et cabeça dos Iccóxos)、一向宗はルターの宗派のようなもので彼らが説くところによれば、人が救われるには阿弥陀の名を称える以外に必要なものはなく、己の業によって自らを救うことができると考えるのは阿弥陀に対する侮辱であり、救いはひたすら阿弥陀の功徳によるのであるという。十八歳になる殿の一子も洗礼を授かった。彼の奥方で、彼を養子にしていた上様は彼がキリシタンになったことを知ると彼を呼び寄せ、彼女に...逆らってキリシタンになったのは事実かと尋ねた。...殿と彼の養育者である重立った仏僧はこの件に救いの手を差し伸べ、上様と彼を和解させた。」[17]

しばらくにらみ合いが続き、1576年頃に久玉城から反鎮尚派が落去し、鎮尚の妻も洗礼を受けて、天草氏領の南部（久玉組）のキリスト教化も始まったであろう。1578年（天正6年）のフロイスの書簡によると、領民のほとんどがキリスト教徒となったという。しかし、司祭は3名、修道士は1名しかおらず聖職者の不足は解消されることはなかった[18]。

大友宗麟の庇護を受けながら、キリスト教を導

入することで、領民をキリスト教徒として均質化して、土豪対立を解消した天草氏は小さいながらも戦国大名となった。反対派は島津や相良と結び、天草は九州の戦国時代末期の時代の流れに組み込まれたのである。

逆説的ではあるが、1587年（天正15年）の秀吉の「伴天連追放令」は、聖職者の追放ではあったが、天草諸島のキリスト教化はこの頃から加速化し、1589年の「天正天草合戦」後に小西領となることで達成された。それ以前に本格的にキリスト教化されていたのは、天草氏だけであった[19]。大矢野氏は、1587年頃まで、栖本氏は天正天草合戦直前、上津浦と志岐氏は直後にキリスト教を受け入れた。本領を安堵された天草氏領では、布教初期のキリスト教が継続していたのに対して、志岐、上津浦、栖本、大矢野のキリスト教化は行長のもとで進められ、村落構造がそのまま信仰組織に編成された[20]。この編成が、島原・天草一揆における天草軍勢の主要な基盤となった。それでも志岐は、布教が早かったこともあり、コンフラリアが信仰組織の核となった。

(2)　教会組織

この布教の時差は、1590年頃から島原・天草一揆までの天草諸島における教会組織の差に表れる。イエズス会士ルイス・ピニェロ（1560～1620年）は、天草にはかつて、河内浦には聖職者養成所（コレジオ）を中心として（「肥後国の河内浦に学校」）、栖本、大矢野、天草（大江―崎津周辺）、宮地、本渡、久玉（牛深）に、「聖職者の共住施設」（レジデンシア）が展開していたと記している[21]。

ここには、いくつかの欠落があるものの、天草のキリスト教布教の歴史と教会組織の発展の様子が描かれている。布教は、河内浦を中心に、南に久玉、西に天草（崎津―大江）、北に、宮地、本渡、そして東に栖本、大矢野へと展開していった（図4参照）。

史料4

ルイス・ピニェロ『日本切支丹迫害史』[22]

Casas, resdencias que los padres de la compania tuvireon en el Iapon, y se predieron en varias persecuciones, y mudancas que buuo de Reyes：教団の神父たちが日本で保持し、そして様々な迫害において失なった 拠点と居住（布教）施設。

「同国の栖本、同国の大矢野、肥後国の河内浦コレジオ、同国の天草（崎津―大江周辺)、同国の宮地、同国の本渡、同国の久玉：‘En Sumoto del mismo Reyno, En Oyano del mismo Reyno, En Cauachinoura Reyno de Figo Colegio, En Makusa (天草でAが脱落)[23] del mismo Reyno, En Miyagi del mismo Reyno, En Fondo del mismo Reyno, En Cutam del mismo Reyno’。」

1617年（元和3年）時の管区長マティウス・デ・コーロスの報告書は[24]、大矢野と上島の上津浦の信徒団と下島北西部の信徒団の違いを類推させる（表1)。大矢野と上島は、小西行長の地方行政化の中で信仰組織が作り出された。そのためか（もっともこれはこれからの検討課題であるが)、組織は、広域のコンフラリアを統括する惣代、庄屋と肝入りの村役人と村ごとの組の頭、そして世話役の看坊と慈悲役からなっていた。大矢野ではイングナシオのコンフラリアが知られているが、それが行政組織と表裏一体を成していたのであろう。これに対して、下島は、いくつかのコンフラリアを構成する村の有力者が信仰組織を代表していた。その一人、1632年に殉教した富岡の大丹田与三郎は、「切支丹達の頭で、富岡の奉行」であった[25]。下島はキリスト教化が行政化よりも先行していた。天草諸島のキリスト教徒の人口も下島、それも旧天草氏領が圧倒的に多かった。

関ヶ原の後、天草諸島は寺沢志摩守広高の領地となった。寺沢は、1614年（慶長19年）の禁教令以後、キリスト教徒弾圧を強める一方で、コンフ

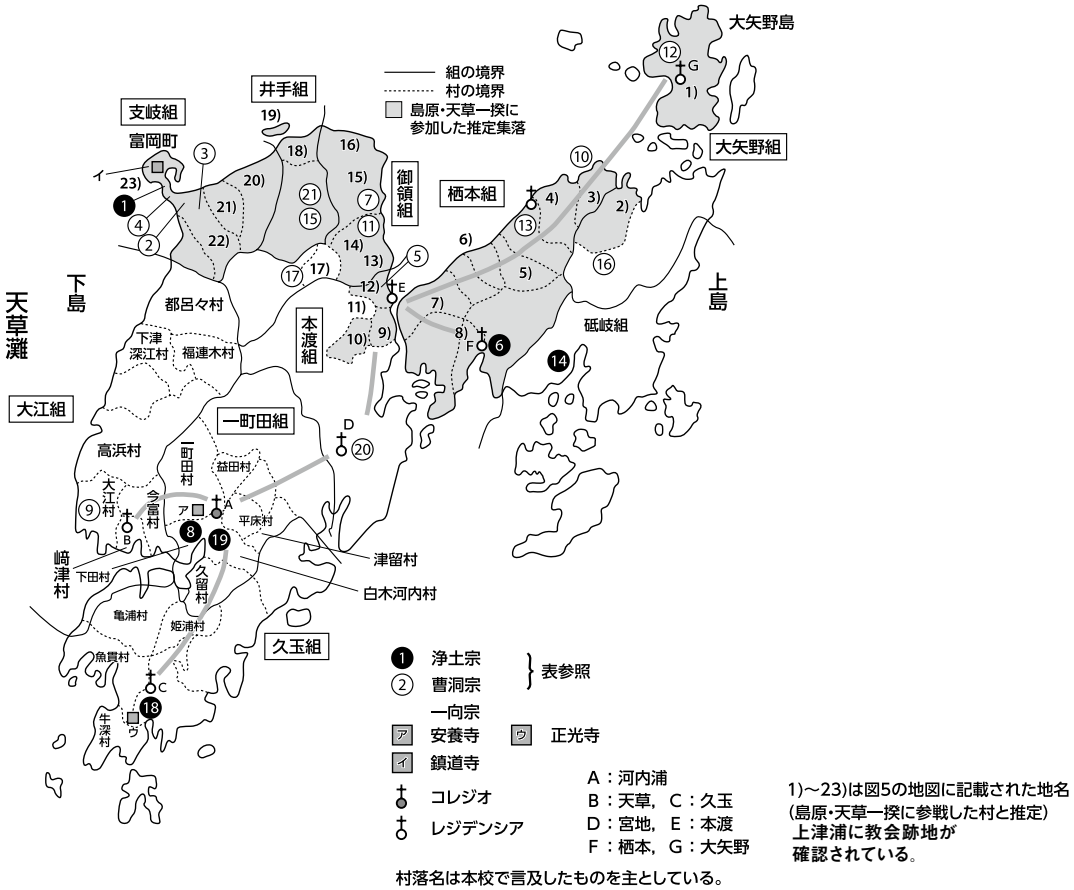


図4　16世紀後半から17世紀前半における天草の宗教空間と行政組織

1)～23)は図5の地図に記載された地名（島原・天草一揆に参戦した村と推定）

ラリアの信徒集団を一向宗の門徒に強制的に吸収する政策を断行した。その中心となったのが、河内浦の安養寺と本渡から移っていた富岡の鎮道寺であった。とくに安養寺は、1615年（元和元年）に河内浦のキリスト教徒の吸収を目的として創建された[26]。キリスト教徒が最も多いはずの河内浦がコーロス徴集文書からもれた理由であろう。

(3)　島原・天草一揆

天草諸島のキリスト教徒社会の歴史的、構造的違いは、島原・天草一揆にもみてとれる。もちろん、一揆の戦いの中心が、有明海沿岸にあったという地理的限定もあるが、村という行政組織を単位に軍勢が動員されたことは重要である。

「稿本原城耶蘇乱記」の原城に籠城した村と人数をみると[27]、天草勢の2892名という数値はあまりにも過小評価ではあるが、一般に言われる8000名として1593年頃には天草には23000人のキリスト教徒がいたというイエズス会の調査が信用できるとすれば、相当数の信者がまだ島内に、それも下島の旧天草氏領に残っていたと考えられる。図5は天草全図であるが、肥大化した富岡や三宅藤兵衛の屋敷が描かれていること、描かれた村が、「稿本原城耶蘇乱記」で天草から参戦した集落で

表1　コーロス徴集文書にみる宗教組織

上島				下島			
	村	役務	氏名		村	氏名	乱後の庄屋
1	上津浦	惣代	楠甫勝（庄）介	1	内野村	大長嶋九兵衛	（大）長嶋
2		庄屋	梅尾七兵衛	2		ささ原与兵衛	
3		きも入	雁（高）戸市長兵衛	3		飛瀬外記	
4		きも入	神代喜兵衛	4	二会	松田杢左衛門	長嶋→池田
5		組親	長井二左衛門	5		宮崎権兵衛	
6		組親	馬場新右衛門	6		茂嶋与三兵衛	
7		組親	冨田忠介	7	坂瀬川	川崎市右衛門	岡部
8		組親	前田三良左衛門	8		構野上与四衛門	
9		組親	池井善右衛門	9		前田弥右衛門	
10		慈悲役	大平次右衛門	10	志岐	平井与右衛門	（大）平井
11		看坊	溝口市左衛門	11		中村四郎左衛門	
12		看坊	中村与左衛門	12		橋本金助	
13		看坊	渡辺九良衛門	13	福路	大丹田与三左衛門＋	荒木
14		看坊	町薗五左衛門	14	（富岡）	鶴田理左衛門	
15		看坊	中村伊左衛門	15		荒木兵左衛門	
16		看坊	松井小左衛門	16	冨岡下町	橋本又左衛門	
17	大矢野	惣代	渡辺小左衛門	17		橋本五右衛門	
18		庄屋	渡辺九右衛門	18	都呂々	佐渡九兵衛	酒井
19		庄屋	内田与右衛門	19		益福助左衛門	
20		庄屋	会津治右衛門	20	下津深江	西嶋金七郎	西嶋
21		庄屋	内田清左衛門	21		西嶋右馬亟	
22			越智将監	22	小田床	橋口市左衛門	伊野
23			山下与左衛門	23	高浜	内田与七郎	上田
				24		立石藤右衛門	
				25		中村次郎兵衛	
				26	今富	大矢敷彦左衛門	大崎→上田
				27	崎之津	松永治郎左衛門＋	吉田
				28		野田玄蕃左衛門	
				29		松長二兵衛	
				30	大江村	赤崎孫右衛門	赤崎→松浦
				31		馬場喜介	（大）
				32		田中廣介	
				33		香月与左衛門	
				34		内田助八郎	

典拠：鶴田倉蔵『天草鶏肋史』(2012), pp. 102-107。＋は殉教者。

あることから、この図は一揆後に描かれ権力の在り方を強調したものであろう。参加した村は、布教期の天草氏領地の外にあるものが中心であった。

下島南部のキリスト教徒が一揆に参加しなかったわけではない。河内浦では郡代屋敷が襲われている。原城へ渡りそこね、1638年3月18日に富岡の冬切の浜で処刑されたキリスト教徒の中には一町田村5人、白木河内村1人、主留村1人、今富村5人とその枝郷の小嶋村3人、崎津村16人、羊角湾の対岸の亀浦村の4人が含まれていた[28]。それでも西目筋のキリスト教徒は、コンフラリアや村といった組織では参戦はしなかったのである。そのためこの地図に描かれることもなく、相当数のキリスト教徒が権力の網からもれることになった。

一揆の際に捕縛された大矢野の惣代、渡辺小左衛門は、「天草の島中には男女25000人のキリシ

表2　天草諸島におけるキリシタン人口の変遷

年	天草氏領	志岐氏	上島・大矢野島	天草諸島全体
1580年（天正8）	8000～10000	1000	0	9000～11000
1583年（天正11）	15000	1000	0	16000
1590年（天正18）天草合戦～1592年（元禄1）	15000	1000	7000	23000

典拠：平岡隆二「天草キリシタンの成立と展開―16・17世紀の羊角湾域を中心に―」『国文研究』（熊本県立大学日本文化会）58（平成25年）74頁。

図5　天草全図

三宅藤兵衛などの寺沢藩側の島原・天草一揆時の関係者の住宅などが描かれていることから、一揆に参加した集落など、当時を反映していると推定している。（掲載に関しては松浦四郎氏に謝意を表する）

表3　図5に記載された集落（図4参照）

1)	大矢野	13)	広瀬村
2)	楠甫村	14)	佐伊津村
3)	大浦村	15)	御領村
4)	須子村	16)	鬼池村
5)	上津浦	17)	広瀬村
6)	島子	18)	二江村
7)	志柿村	19)	通詞島
8)	栖本	20)	坂瀬川村
9)	亀川	21)	上津深江村
10)	食場村	22)	志岐村
11)	馬場村：茂木根	23)	富岡町
12)	本渡村		

＊図で確認できない村は除外した。

タンがいて、この内、西目筋には男女5・6000人がいる」（この数は覚えておいて欲しい）と幕府側に告白している。受洗を行う以上、キリスト教徒の信徒数は思いのほか正確である。幕府は、この男女5・6000人が立ち返る可能性があることを意識して、転び切支丹が存在しているという「記録」（『転切支丹並類族死失帳』）を継承していくのである。

2．禁教体制と信仰

(1)　幕府の宗教統制

幕府は、1612年（慶長17年）にキリスト教禁止令を出し、改宗したキリスト教徒を寺が保証して寺請証文を出す檀家制度が始まった。島原・天草一揆の影響もあって、民衆は身分問わず特定の寺に所属し、檀家であるという寺請証文を受けて、キリスト教徒ではないという証明をしなくてはならなかった。この寺請制度は、民衆が仏教徒となることを義務付け、仏教を体制的正統宗教としたのである。これによって、キリスト教徒のみならず、体制権力を受け入れない宗教は、権力の存在を脅かす異教として弾圧の対象となった。そして、ここから日本のキリスト教は二重の異端―正統カトリックと正統幕府的宗教体制―と泯淆的土俗化の道、すなわち「キリシタン」への道を歩んでい

くことになるのである。以下、キリシタンという用語を使用する。

寺はその壇家世帯毎に全員の名前、年齢、続柄、家畜、持ち高などを記した人別帳（宗門改帳）の作成を命じられた。結果的に先駆的な戸籍が誕生した。これによって、寺請を受けられない人々は、非人あるいは無宿人として社会的権利を否定される体制的差別も生まれたのである[29]。その一方で権力の側は、『転切支丹並類族死失帳』を作成し元キリシタン世帯を時間的に監視したのである。

1642年（寛永19年）に幕府領となった天草の初代代官に任じられた鈴木重成は、天草に10の組と大庄屋を置き、86、後に87の村と庄屋を配置し行政的統治を開始した。さらに兄で曹洞宗僧侶である鈴木正三を招いて、天草の宗教体制を構築した[30]。

1642年（寛永19年）から1653年（承応2年）の11年間で鈴木兄弟が再建・開基〔以下開基〕した寺は、曹洞宗15、浄土宗6である。興味深いのは表4と図4が示すその開基の時間と場所である。開基はまず統治の中心である富岡、それも一向宗鎮道寺を見下ろす城山に、徳川幕府御廟所としての浄土宗の寿覚院から始まり、次いで志岐、御領、本渡と一揆勢の進軍を逆に行くかのように建設が進んだ。

同時に一揆には組織的に参加していなかった天草布教の中心地河内浦に崇円寺と信福寺の浄土宗の2寺を開基（あるいは再建）し、大江には曹洞宗の江月院を開基した。キリシタンの中心地域に監視の楔を打ち込んだのである。

浄土宗寺院の分布は、下島では、河内浦の崇円寺と信福寺が、一向宗の安養寺を、久玉の無量寺が、やはり同じ一向宗の久玉の正光寺にほぼ隣接して創建された。残りの二寺は、いずれも上島の八代海側に面している。島原・天草の一揆に参加し、人口が激減して入植が行われたであろう有明沿岸の村落には、曹洞宗の寺院が配置された。例

表4　鈴木改革で開基された寺（図4参照）

No	寺社名	創建年	場所	宗派	備考
❶	寿覚院	寛永19年（1642）	富岡	浄土宗1	寺領13石
②	円通寺	寛永20年（1643）	志岐	曹洞宗1	？
③	国照寺	正保元年（1645）	志岐	曹洞宗2	寺領45石
④	瑞林寺		富岡	曹洞宗3	寺領15石
⑤	明徳寺		本渡	曹洞宗4	寺領12石
❻	円性寺	正保2年（1646）	栖本	浄土宗2	寺領33石
⑦	芳證寺		御領	曹洞宗5	寺領12石 長興寺分2石
❽	崇円寺		河浦	浄土宗3	寺領30石
⑨	江月院		大江	曹洞宗6	寺領10石
⑩	九品寺		大浦	浄土宗4	寺領 5石
⑪	阿弥陀寺		佐伊津	曹洞宗7	寺領 3石
⑫	遍照院	正保3年（1647）	大矢野	曹洞宗8	寺領13石 金性寺分3石
⑬	正覚寺		上津浦	曹洞宗9	寺領10石
❹	江岸寺		棚底	浄土宗5	寺領10石
⑮	観音寺	正保4年（1648）	荒河内	曹洞宗10	寺領10石
⑯	金性寺		教良木	曹洞宗11	寺領（3）石
⑰	東向寺	慶安元年（1648）	本町	曹洞宗12	寺領50石
❽	無量寺		久玉	浄土宗6	寺領10石
❾	信福寺		河浦	浄土宗7	寺領5石
⑳	明栄寺	承応2年（1653）	小宮地	曹洞宗13	寺領（2）石
㉑	東明寺		御領	曹洞宗14	寺領（2）石

典拠：鶴島博和編『肥後国天草郡―町田組・大江組大庄屋松浦家資料集（1）』（刀水書房、2021年）、p.101。

外は、大江の江月院だけであった。徳川家に馴染みのある、浄土宗や曹洞宗の寺院配置は、キリシタン監視の下での天草の宗教空間を示している。しかし、いずれにせよ、天草の宗教空間に関しては、これからの検証が必要である[31]。

幕府の宗教統制は、寺沢志摩守のときにキリシタン改宗策として導入された一向宗も向けられた。「安養寺由緒記」によると安養寺は、西目筋の転び切支丹の檀那寺となり、「42の村の檀家と門徒を有していた」が、鈴木改革で、門徒は河内浦の中心地の一町田村を外し、白木河内や葛河内（つづらかわち）、などその周辺部と崎津に押し込められたのである[32]。多くの門徒は、崇円寺、信福寺、江月院と権力的に振り分けられた。その状況は、大江組の『転切支丹並類族死失帳』に具に見て取ることができる[33]。

旧志岐領地でキリシタンの改宗の役割を期待された鎮道寺ではあるが、富岡と志岐周辺の門徒は、曹洞宗と浄土宗に割り振られて、檀家は、富岡と志岐を除く西側と、都呂々、小田床、下津深江、福連木、高浜といった、キリシタンの残存が推定される大江組北部に限定された。鈴木改革は、浄土真宗の勢力をはぎ取るという目的もあったのである。しかし、皮肉にも、大江組のキリシタンが、信徒共同体を吸収できない曹洞宗江月院の檀家となったことが、古キリシタン組織の温存へとつながったとも言えるのである。

寺請と檀家制度によって国中の皆仏教徒政策が進むなかで、キリシタンは、異教から正統に対する国内の異端として位置づけられ、後の歴史家たちが古キリシタンとかカクレキリシタンとか潜伏キリシタンとそれぞれの立ち位置でよぶ日本型キリスト教へと変質していったのである。

(2) 古キリシタン組織

では、古キリシタンたちはどのように信仰を守っていたのか。三つの史料からそれを再構成してみよう。

一つ目は、1805年（文化2年）の天草くずれのさい、島原藩が富岡で行った心得違いの者への大江村の「吟味日記」である。詳細は後述するが、信仰は上と下の二つの組とよばれるコンフラリアで守られたことがわかる。その中心は、聖水を管理する水方と暦を管理する帳方であった。聖香油のない状態で、聖水は聖性の伝達体として、受洗と葬儀にそしておそらくは日常的な祈りの場で使用された。

大江には「古寺様」とよばれる場所がある。寺沢による教会破壊前からのものか、1629年（寛永6年）に大江に潜入したジャノネ神父の潜伏場所の跡地かは定かではない[34]。いずれにせよ、信仰共同体の中心地としての「教会」であった。「古寺様」の裏山の越崎からは、キリシタン風の横墓が見つかっている[35]。

信徒の全体礼拝などは不可能であり、祈りは塚とよばれる、殉教者、指導者などの若宮様あるいは善者様とよばれた墓[36]、すなわち祈りの場（チャペル）において、小人数の小組単位で行われたであろう。文化2年の「くずれ」では、吟味方は、今富村の「弓取の墓」を礼拝の場と意識していた[37]。大江桑鶴の山下家は、水方の家系で、住宅二階の「隠し部屋」は隠れた祈りの場として有名である。同じ「隠し部屋」は、古キリシタンの家系である西の西田家にもあるが、いずれも家の建築は文政年間である。「くずれ」の後に隠れるように建設された。古キリシタンの家系に属し、西田家の親族である岩本家には、森宗意軒の配下であった小西家臣団に由来する人物とその妻と家臣の塚が家の敷地内にある。これは、16人の原城からの落人（2人は夫婦）の墓地で、家の祭りの場として守ってきたという。岩本家はこの人物の重臣の子孫と思われる[38]。西田家も家の祭りは従属する名子とともに行ったという。

大江村では、本百姓と名子からなる小組が祈りの単位で、49人からなる頭百姓が信仰指導部を構成し、小組、講組織によって信仰を守ってい

た[39]。

1747年（延享4年）7月に、年貢払いの不備で大江組大庄屋赤崎伝左衛門は職を解かれ、大江村の百姓に後任の選出が任された、という。大江の百姓たちは、一町田村の平野（松浦）四郎兵衛を推薦し、これを大江組の庄屋衆が追認して、結果を富岡の代官所に伝え、受理された。この大江村内部で四郎兵衛就任に積極的に動いたのが、大江村の49人の百姓集団であった。これが二つ目の史料である[40]。

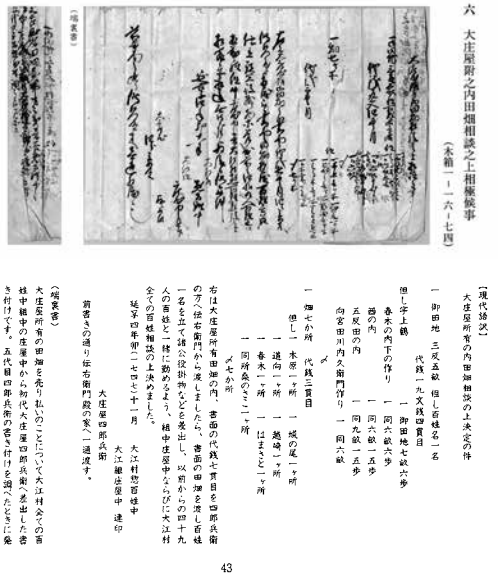
大江村の記憶では、50株49家の百姓名が存在したとある。その構成員は、枝郷の軍ヶ浦、干拓前の海岸線に面した海方（下組）の唐埼、横浜、浜里、大江川沿いの桑鶴、西、里、越崎と井保、山方（上組）の野中（芙頭、田渕、園田、黒勘根、上鶴、大保、八尾）の百姓たちで、いずれも、水方や塚をもつ大江組コンフラリアの指導的家族であった。大江村は、自立性の強いキリシタン百姓による寡頭制支配の村であった。

解任された赤崎伝左衛門は、前述したコーロス徴集文書の大江村赤崎孫右衛門の子孫であろう（表1）。赤崎家はキリシタンであった。そして後任の一町田の平野（松浦）四郎兵衛もまたキリシタンであった。

時計を少し戻そう。前述したが、1560年（永禄3年）の上津浦氏と栖本氏の抗争で、上津浦に組した有馬純忠の依頼を受けて平戸の松浦隆信は20人の鉄砲衆を派遣した。史料で確認できる九州での最初の鉄砲使用である。その鉄砲衆を率いていた先祖だというのが一町田・大江平野（後に松浦）家の口伝である。

口伝の証明は、多くの場合難しい。まずは、松浦家に残る家門の平戸梶が刻印された、口径18㎜の破壊力の強い戦闘用の中筒が間接的な証拠である。また松浦家は、平戸起源と思われる8月15日のシビレ祭を大江水方の山下家と守っていた[42]。これは、松浦が平戸系キリシタン家系であったことのより直接的な証拠となる。

史料5　大庄屋交代の件



六　大庄屋附之内田畑相談之上相撰候事

（未箱一－一六－七四）

【現代語訳】

大庄屋所有の内田畑相談の上決定の件

一　御田地　三反五畝　但し百姓名一名

代銀一九文銭四貫目

但し字上鶴

春木の門下の作り　一　同六畝六歩

畦の内　一　同六畝一五歩

五反田の内　一　同九畝一五歩

向宮田川内久衛門作り　一　同六畝

一　四七か所　代銀三貫目

但し一　本原一ヶ所　一　城の尾一ヶ所

一　道向一ヶ所　一　越崎一ヶ所

一　春水一ヶ所　一　はまこと一ヶ所

一　同所桑のさこ一ヶ所

〆七か所

右は大庄屋所有田畑の内、書面の代銀七貫目を四郎兵衛の方へ仕右衛門から渡しましたら、書面の田畑を渡し百姓一名を立て諸公役御物なども差出し、以前からの四十九人の百姓と一緒に勤めるよう、組中庄屋中ならびに大江村全ての百姓相談の上決めました。

延享四年酉（一七四七）十一月　大江組惣百姓中

大庄屋四郎兵衛

大江村惣百姓中　連印

前書きの通り伝右衛門殿の家へ一通渡す。

（端裏書）

大庄屋所有の田畑を代り払いのことについて大江村全ての百姓中組中の庄屋中から初代大庄屋四郎兵衛へ差出した書き付けです。五代目四郎兵衛の書き付けを調べたときに発見しました。

43

鶴島博和編『肥後国天草郡一町田組・大江組松浦家資料集（1）』（刀水書房、2021）p.43。

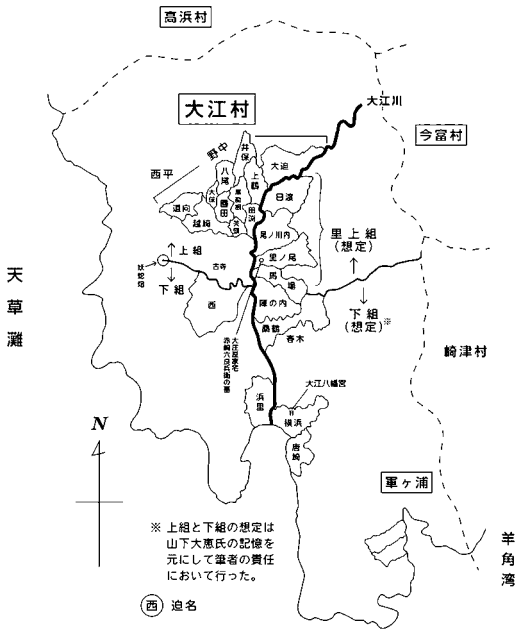


図6　大江村49人の所在地[41]

前述したように河内浦のキリシタン化を進めた人物はドン・リアンであった。松浦家四代、一町田組大庄屋松浦半之丞の戒名は、リアンの名を組

み込んでいる。リアンに理安とか里安を当てるのは一般的であった。

「□□　元年
元　天運理安信士　霊位
四月二日」

松浦家の家系は、初代から、六代までは不確かなことが多く松浦半之丞は初代でリアンであった可能性が高い。いずれにせよ、松浦家はリアンの記憶を残していた[43 44]。

松浦家と山下家が、同じシビレ様を崇敬していたとすれば、山下家も松浦に従った平戸衆を起源に持つのかもしれない。山下大恵氏の自宅の鴨居には槍と鉄砲の錆びた銃身が飾られていた。氏の父親の時代には刀もあったという。山下家と親族関係にあった丸山家の姓が、河内浦の丸山からだとすれば、丸山家も松浦家や山下家とともに河内浦から大江に移住してきた平戸鉄砲衆の流れだと推測することもできる。但し、丸山家に関しては証拠がない。

一方、大江西の岩本家と西田家は、前述したように小西の浪人に繋がると推測することもできる。大江の頭百姓49人衆は、小西と平戸の武装集団を起源としていたのではないだろうか。

延享4年の大庄屋交代劇は、表向きは年貢未払いではあるが、赤崎が古キリシタンであり、信仰を捨てなかったことが原因ではないだろうか。その際、赤崎伝左衛門に繋がる、人々の離散が始

図7　松浦家所蔵の中筒火縄銃

口径18mm（10匁）、外径は38から43mm長さ1075mm、幅は最大で70mm、最小で30mm、重さ7.5kg平戸梶の家紋入り。
（掲載に関しては松浦四郎氏に謝意を表する）

図8　シビレ様（知邊神社・志留部神社）―松浦家と山下家共同の拝塔―

周囲にはキリシタン墓地にもみられた白石が敷き詰められていた。現在でもそれは確認できる。塚は南の武双山への尾根上にある。（筆者撮影）

図9　松浦半之丞の墓石

崇円寺の一町田組時代の松浦（平野）家の墓地内。四代ではあるが、墓石は関西の御影石（大石一久氏による）で見た限りでは、もっと古い印象がある。

まった、と考えている（後述）。しかし、大江の49人衆もしたたかで、同じ古キリシタン（おそらくは、一向宗と浄土宗との混淆）の松浦家を呼び寄せた[44]。松浦は大江で曹洞宗江月院の檀家となった。

(3)　海域九州のキリシタンネットワーク

三つ目の史料は五島にあった[45]。五島奈留島に残る「今日の御じき」あるいは「今日の御慈悲」といわれる祈祷文は、奈留島松山集落の松山家が伝えたもので、絹地の大きさは幅330mm、長さ2500㎜で、書体から、おおよそ18世紀中頃から19世紀初頭までのものである。祈祷文の第六番目に、祈りの証人（あかしびと）の名が挙げられていて、連祷の執成しとなっている。

史料6

〔富岡〕❶富岡の千人塚の御役〔大江〕❷大江のたいら塚の御の御あるじ様。（十二人様ゑ）[46] ❸赤崎六良兵衛様[47]。❹つれいあい女房ひつなえ。❺ふる寺の御役人〔水方か〕。さんしや御こふべ様。〔崎津〕❻さしのつ二本松の御役人。❼善人様。じあんだ様。三□くるす様。あくるす様。❽中町の川上にござなさるご両人の御兄弟様。さんべいとろ様。さんばうろ様。❾川おこん里うさしたる新べさんとみい様。❿つれあいの女房。⓫唐人様。⓬川の御役人様。とうみつ三止免い様。まるや江〔今富〕⓭今富の塚のあるじ様。天日様。ひるやす江。(3)御ささけ上げ奉る。〔崎津東岸以降〕⓮むかえの御松に御さなるゝ　ほしびるなんやす江。⓯嶋子の塚のあ（る）じ様。(4)御ささけ上げ奉る。日本かいさんたまもの　その御かいさん三ふらんすすこ様。とうま三じわん　三平とろ様。(5)御ささけ上げ奉る。〔外海〕〔神浦〕⓰神浦の塚の御あるじ様。⓱御役人方々〔帳方、水方、聞き役か〕。(6)御ささけ上げ奉る。おくるす様　。御ささけ上げ奉る。〔池島〕⓲池島の塚の御あるじ様。⓳善人様。御くるす様へ。(6)御ささけ上げ奉る。(7)今

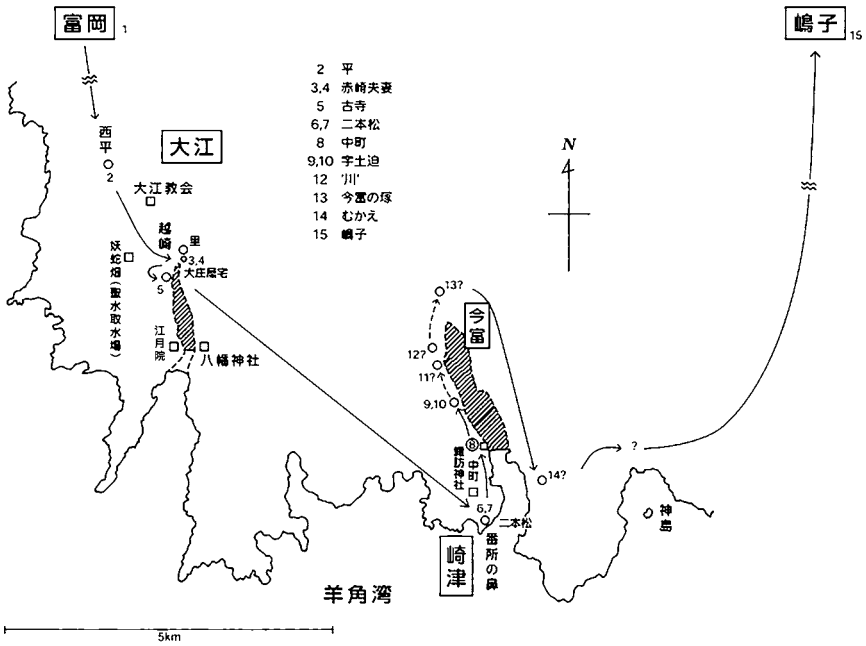


図10　祈祷文の証人のプロセッション

図11　赤崎六良兵衛の墓　（一番左；報告者撮影）

日の御奉公として御ささげ上げ奉る。御受けとりくられましたるそのあと押ししたる人へ御与えくらさるる様に謹んで願いあげ奉る。

祈祷文は、「千人塚」という島原・天草一揆の本島における殉教の地から始まり、大江に下り、指導者であった❷平の塚に眠る善者、❸赤崎六良兵衛と❹妻のひつなに祈りがささげられた。赤崎六良兵衛は大庄屋役を解任された赤崎伝左衛門の子か孫であろう。もしそうであれば、赤崎本家は、外海そして五島へと流れていった可能性がある。赤崎は、元和三年のコーロス徴集文書の大江のキリシタン指導者であった赤崎孫右衛門の子孫であろう（表1参照）。❺ふる寺の御役人は水方で、推定される古寺跡地の裏山には聖水の取水場とされた「妖蛇畑」があり、水方が守っていた。崎津の中町の二人の兄弟❻は、コーラス徴集文書に記載された二人の松永の子孫であろう。❾と❿は、今富に向かう往還沿いの宇土迫集落、⓫は漂着や交易等で崎津に定住した中国人の墓であろう。海域アジア交易の終着地の一つである羊角湾沿いには、大江唐崎などの地名や唐人墓が多い。⓭は文化二年のくずれで探索方によって破壊された「弓取の墓」で今富集落の祈りの中心地であった。⓯の島子は富岡と同じ島原・天草一揆の激戦地でキリシタンが戦死した場所である。オラショの天草分は、二部構成になっていて、❷から⓮までは、大江、崎津・今富のキリシタンの記憶への、最初と最後の❶と⓯は導入と終末で島原天草の一揆の記憶への祈りであった。

この祈祷文を伝えた奈留島松山集落の松山家は、大江集落の指導的キリシタン一族と繋がるのでないだろうか。現在の大江天主堂の敷地は、赤崎家と松山家のものであった（西田茂正氏、玉木譲氏）[48]。1747年の大庄屋更迭で赤崎家とその関係者である松山家の一部は、赤崎伝左衛門と共に、高浜や崎津、そして外海へ移動し、外海の神浦と池島で「初穂の祈り」を唱え始めた、とは言えないだろうか。

神浦と池島という外海の北辺の二つの集落で祈祷文に当地での祈りが付け加えられた。そして外海から五島奈留島の移住によって連祷部分は完成した。

連祷の証人（あかしびと）は、神への執成しのみならず、祈るものたちの帰属意識を表している。大江・崎津・今富→神浦・池島→五島奈留島松山という祈りの道は、西海のキリシタンたちが築き上げた海の信仰ネットワークを示していた。こうした海域ネットワークによって信仰は維持されたのである。天草灘から五島灘にかけてのキリシタンは海民の信仰でもあった。大江や崎津の漁民のキリシタンたちは、五島や甑島を庭としていた。五島のキビナゴ漁は崎津から伝わったと言われる。甑島では大江の漁民たちが鮪漁や鰹漁を行っていた[49]。五島から甑島の間の天草灘は、まさにキリシタンの共存圏であった（図1）。

3．天草くずれ[50]

(1)　転び切支丹と心得違い

天草キリシタン教揺籃の地、一町田組には、転び切支丹類族が残存していた。1750年（寛延3年）は一町田で67家系、1760年（宝暦10年）には下田村で12家系、宝暦11年に津留村で13家系、市瀬村で1家系、平床村で3家系が記録されている。同

じ宝暦11年の崎津4家系、今富5家系と比較しても、その数は際立っている[51]。彼らはいつでもキリシタンに立ち返る可能性があった。このことは幕府も認識していたであろう。

牛深や本渡にもキリシタン信仰は生き残っていた。富岡寿覚院（曹洞宗）に残る1773年（安永2年）9月23日付の恵海和尚にあてた「牛深茂串の心違いの者の詫び状」では、百姓覚兵衛以下、男10名、女1名の計12名が密かに邪宗を信仰していたので、寿学院の恵海和尚が、12名を正しき宗門に立ち返らせた、とある[52]。茂串は久玉の無量寺（浄土宗）の檀家村であり、正道への教導は本来は無量寺の仕事である。それを富岡にある寿学院の僧侶（恵海が住職に就くのは後の事である）が関わるというのは、富岡代官所の指示である可能性を指摘できる[53]。

大江組の『転切支丹並類族死失帳』では、大江の新四郎（1625年没で檀家寺は一町田の安養寺）の嫡女まんが牛深漁師十三郎に嫁いで、「大江新四郎系」として、類族が牛深の百姓として記録されている。十三郎は茂串の漁師と推測できるのではないだろうか（茂串の位置は図4）。

茂串では、1829年（文政12年）に茂串鮪浦が開拓され[54]、幕末であるが、慶應3年に冬場4か月の漁期に、10人の漁師が一人一両半を出して、鮪網の権利を借り出している。金銭を支払っての借り出しということは、収益があるわけで、大江村と並んで鮪の市場がすでに形成されていたことを示している。茂串の漁労は大江の漁労、それも鮪漁や鰹漁との関係が深かったものと思われる。海辺のキリシタンの生業は、天草灘一帯での信仰ネットワークを強固なものとしていたのである[55]。

さらに1775年（安永4年）に本渡の本村においても同じような事態が発生し、奉行所が執成している[56]。

同じ頃（1805年から30年ほど前）、大江村の弥平は、自ら江月院に心得違いを告白して[58]、改宗を申し出た。彼の行為は村の動揺を誘い、江月院は改めて村の百姓全員に転び証文を差し出すよう命令している。結局弥平の転びは認められず、1805年の吟味では5月23日と25日の二度富岡に呼び出されている[59]。

史料7「牛深茂串の心違いの者の詫び状」[57]

掲載に関しては浄土宗帰命山寿覚院住職山城亮善氏に謝意を表する。

史料8

「右の弥平は心得違いの者です。弥平の妻も心得違いの者です。ところが弥平は丈左衛門という者の娘と夫婦になり、心得違いの件について旦那寺に通達し証文を差し出し、裏書を出して改宗したと言っていますが、その件については村全体の噂は悪いので、百姓一人ずつの証文を差し出すように江月院から命じられ、皆（証文を）差し出しました。この種類の証文では証拠にならず、三十年前に改宗したように言っていますが、そのようでは無く、やはり心得違いの者だと身近な人も知っています。：右弥平儀、心得違之ものニ御座候、弥平妻茂心得違いのものニ御座候、然處弥平、丈左衛門与申もの娘与夫婦ニ相成候上、心得違之儀、旦那寺江申達證文差出、裏書申請改宗仕候由申之候得共、其砌者村方一統風聞悪敷有之候ニ付、百姓壱人別ニ證文差出候様、江月院ゟ被申渡、皆指出申候、此類之證文共ニ御座候ハ、證據ニ者相成申間敷、三十年来改候様之申口ニ御座候得共、全左様ニ而無御座、矢張心得違仕居候趣、身近ク仕候もの茂存罷有申候」[60]

江月院は村の大半がキリシタンであることを知っていたのである。しかし、この時点では大きな問題とはしていなかった。キリシタンの位置が変わっていたのである。体制を危機に陥れる異教キリスト教は存在せず、キリシタンは、幕府仏門体制の外にある異端の「邪衆の者」となっていた。必要なのは処刑ではなく、「正道」への導きであった。

(2) 探索前夜[61]

1783年（天明3年）、島原藩が天草を預かった時点で、領内のキリシタンの存在は周知のことであった[62]。とくに西目筋での「牛殺し」の風評は聞こえていた[63 63a]。島原藩としては風評を正し藩の面子を保つ必要があった。しかし、1792年（寛政4年）の雲仙岳噴火の被害対策に追われ、さらには天草内に直接審問の在地でのフィクサーがいなかった島原藩にとって、天草の改めは容易ではなかった。その「フィクサー」となったのが高浜庄屋上田宣珍（源作）であった。国学に傾倒していた上田宣珍と島原藩士にはつながりがあったのであろう[64]。

直接的な切っ掛けとなったのが、1801年（寛政13年）1月25日の今富村庄屋大崎吉五郎の病死である。大崎家は世襲の庄屋で、「コーロス徴集文書」で今富のキリシタン指導者とされた大矢敷彦左衛門は彼らの祖で、転びキリシタンの家系であった（表1参照）[65]。息子幾太郎は3歳の幼少とはいえ、妻の実家は崎津の庄屋吉田家であり、妻の兄吉田宇治之介が甥の庄屋代行を務めることができた。しかしそうはならなかった。

3月1日、島原藩は宣珍の弟で養子となっていた上田友三郎を高浜村の庄屋見習いに任命した。4月22日に事が動いた。今富村の三人の百姓が高浜村庄屋上田宣珍（源作）を訪ね庄屋兼任を願いでた。宣珍はこれを断った。6月19日には年寄り衆が再度願い出たが、宣珍は再び申し出を断った。それで、「代官所に申し出て代官所から沙汰があればよろしいですか」と申し出た。この村方一統を装った手続きを経て、9月1日に宣珍は藩から正式に今富村庄屋に任命された[66]。9月3日、宣珍は崎津の吉田宇治之介を表敬訪問したが、怒りが収まらない宇治之介は途中退席している[67]。彼は夕方大江に立ち寄り大庄屋の代理を務め、通行手形の取り扱いを行い、中山経由で高浜へ帰っている[68]。

宣珍は、「邪宗取り締まり」という指令を藩から事前に受けていた（後述）。高浜に転びキリシタンが多数存在し、その多くがキリシタンとしての慣習を守っていたことを宣珍は知っていた。探索の仕事のため、宣珍は足元を「綺麗」にしなくてはならない（一種の宗教ロンダリング）。6月19に今富村の百姓が二回目の依頼に来たその前日から、宣珍は準提観音の印施（版画摺像）1500枚を村に配布した。準提観音は「仏の母」であり、マリア信仰が盛んな西目筋では転宗あるいは隠れ蓑となりうると踏んだのであろう[69]。1805年（文化二年）6月の宣珍の頭の中では予定にはなかった高浜での吟味に際しては、彼は「村内にも白木河内の百姓どもに不信心の様子が見えましたので、五年以前から準提観音の印施を、白木河内を始め村中に配りました。…その後は心得違いはやみましたし、それ以来この準提観音信仰してまいりましたし、その年の冬には東向寺での授戒会に庄屋の私と村中から百人を超える者が参加し、血脈（法門相承の略譜）を承りました。…当村において心得違いの者はおりません。」と白をきっている[70]。

(3) 探索方

1802年（享和2年）4月島原藩士大竹仁左衛門が富岡に郡方改役として赴任した。大竹は国学を学んでおり宣珍とは思想的に同じ土壌に立っていた。二人の思想と関係は、宣珍が大竹に貸与あるいは贈与した書籍や付け届けからも窺い知ることができる[71]。

1802年（享和2年）12月8日、藩は宣珍の弟で

養子となっていた上田友三郎を宜珍の代わりに今富村の庄屋に任命した。

1803年（享和3年）4月に、大江の江月院に、長崎の大同庵から、仏像の鑑定士である鑑司として大成和尚が赴任した。こうして探索方は出揃った。今富村の庄屋上田友三郎は10月から1804年（文化元年）4月までの半年間、「上田友三郎日記」を書き綴った[72]。この日記から彼の探索方という役割は明らかである。1803年（享和3年）12月18日、大竹は、友三郎たちの探索を褒め、「村を正道に戻すという気持ちで取り締まりにあたって欲しい。お主は、邪宗の取り締まり、この一点で今富村に送られたのだから、ひたすら心掛けるようにせよ（大竹様ゟ被仰聞候ニ者、是迄之取斗方至極宜段被仰聞候、随分志ヲ厚ニして取締方いたし候様、此一件而已ニ今富村へ差越被遊候義ニ候間、専一ニ心懸候様被仰聞候）」[73]と念を押した。大竹の言葉に、宜珍と友三郎の庄屋就任が島原藩の異宗探索という目的でなされたことがわかる。

1804年（文化元年）2月22日上田友三郎は、「日記」にもとづいて「報告書」を作成し富岡役所に提出した。そこには、今富村の心得違いの者の生活実態、信仰状況、日繰りの仕方[74]が記載され、別紙として、今富、大江、崎津の各村の邪頭之者（リーダー）の名前と居住地が掛かれていた。村民の「正路成者」（素人）とキリシタンは、名前や居住地を、前者は漢字、後者はカタカナ表記で区別した。記録された心得違いの指導者は24名で、組織の割り出しを行い、その重要度に応じて一から四までの格付け行い、この中には牛殺し関係者8名も含まれていた[75]。しかし一貫して高浜は報告書からは外された[76]。宜珍の画策で高浜には「心得違いの者」はいなかったのである。文化元年には「発覚」のシナリオの原型は出来上がっていた。

(4)「天草くずれ」と「鎖国」の誕生

1804年（文化元年）2月、郡方改役の大竹仁左衛門は島原に戻ってから上司郡方勘定奉行佐久間六郎兵衛に上田友三郎らの調査結果を報告し、それは中老羽太十郎左衛門を経て藩主の耳に届いた。ここから吟味の具体的作業が始まった。まずは長崎奉行所に報告してから、幕府へ伺いを立てなくてはならない。大竹仁左衛門はその伺書の作成を開始した。

3月、大竹や上田親子（兄弟）と対立し、2月に解任されていた大成和尚が、長崎で天草の異宗事件の話を口外し噂が広がった。島原藩は幕府に伺い書を提出する前に、話が幕府の耳に届くことをおそれ、大成和尚の懐柔と買収を行った。大成和尚は口外したことはないとしつつ、上田親子に対する憎しみをあらわにし、「高浜も同じではないですか。確かに証拠はありませんが、仏の道に背いていますし、牛などを殺して高浜から持ち出す様を見たものもいるのですよ」と反論している。

大成和尚の口封じに成功した頃の8月26日、大竹仁左衛門と上司の佐久間六郎兵衛が江戸に到着した。二人は伺い書を正式な書類にするために幕府役人に「伺い書」の書き方指導を受け提出し、付箋を付けて返還された。伺い書は大竹が書き直し、10月4日に佐久間六郎兵衛の名で提出された。

島原で作成した草稿（A）と幕府役人に訂正を受けて幕府に提出した伺い書（B）の間には違いがある。主要な点のみを挙げてみよう。まず、（A）二人の村役人（宜珍と友三郎）が真心を込めて探索にあたった（「村役人之内ニも実義成者壱両人内意申聞置」）という大竹の上田への配慮は、（B）（「村役人之内ニも実義成者へ内意申」）と二人が削除され、（A）「大江組之内崎津村、大江村、今富村」のリーダー（頭立候者）大江村市蔵以下15名の名前が削除され、代わりに（B）「全員道理を弁えない百姓たちは、先祖代々伝えてきた風習を守り、一切の道理に暗いまま思い思いに講会などを開き、中には自然と頭立なる者もいる」とされた。吟味前に吟味の結果は見えていた。また心得違いの者の数も、（A）「およそ男女5千

人余り」が、（B）では「三ヶ村で老若男女すべてで六千人」と千人ばかり増えている。吟味の前に、結論と心得違いの者の数がすでに決められていた。島原藩も幕府も、かつて島原・天草一揆での渡辺小左衛門の自白の史料をもとにしたのであろう。判明したといわれる5205名は、渡辺小左衛門の口述と幕府の原案をもとに、島原藩の方で作り上げた「これくらい」の数字ではないだろうか。そして、草案と伺書の最大の違いは、大成和尚の活躍によって「心得違い」が発見されたような書きぶりにある。ここには、発見（つまり知らないふり）を捏造し、大成和尚の手柄にして彼の口を封じて、吟味を始めるという、玉虫色の幕府の助言と島原藩の意図がある。上田親子が準備し、大竹と幕府のすり合わせの中で、「天草くずれ」は誕生した。吟味は、付箋付きの伺い書をもとに開始された。そこには幕府執行部の命令書である奉書はなかった。あくまでも地方の事件として処理され、幕府は直接関与はしなかったのである[77]。

もう一つ誕生したものがある。世界史的な意味での「鎖国」である。同じ頃、1804年（文化元年）8月3日、ニコライ・ペトロヴィッチ・レザーノフが、ロシア皇帝アレキサンデル一世の親書と先年ラクスマンが持ち帰った信牌を携えて、「正式な国王使節」として長崎に来航した。しかし、一行は出島近くに留め置かれ、幕府からの返答は遅く、ようやく1805年3月9日になって目付役遠山景晋から、「中国・朝鮮・琉球・オランダ以外の国と通信・通商の関係を持たないのが祖法」としてロシア帝国の外交要求が拒絶された。レザーノフは3月19日に長崎を離れた。天草の心得違いの者の吟味は、レザーノフが滞在中の3月11日に開始されたが、幕府にとっては「天草くずれ」どころではなかったのである。「吟味開始後、島原藩は長崎奉行に吟味の様子を報告したが、長崎奉行側からの連絡はなく、暫く経ってから「おろしや（ロシア）人の呼出しで混雑していて、連絡も不行届きになり、失礼しました」という旨の連絡が入った」[78]くらいである。

ヨーロッパ的外交の視点からすれば、幕府の対応は非礼であった。しかも祖法を持ち出したことは、ヨーロッパ諸国に「鎖国」を宣言したことになる。ヨーロッパにおいては、主権国家と法治の概念が生まれつつあった時代である。1807年（文化4年）のロシアの戦艦による樺太の松前藩番所の攻撃は、この文脈で考えなくてはならない。これに対して幕府は同年12月に「ロシア船内払令」を発布して警備体制を構築した。ここに「鎖国日本」が誕生した[79]。

ロシア船の到来は、島原藩にさらなる圧力を加えた。藩は、想定で5千人を超える心得違いの者の探索に、騒乱も予想していた。藩は、ロシア船に対する警護のための「ロシア手当」を流用して、人員150人を15日間動員できる態勢（「日数十五日分之積上下百五拾人余」）を整えていた[80]。しかし、この数は島原・天草一揆のレベルを想定したものではない。

(5) 吟味方

2月30日、富岡代官所勘定奉行川鍋次郎左衛門が、役所に現地で取り調べに当たる役務者を招集した。その陣容は、以下の通りである。大江村は、地役人の山方、江間新五衛門、志岐組大庄屋の平井為五郎、江月院の僧侶で鑑司の万機、崎津村は、久玉組大庄屋中原新五、福連木村庄屋の尾上文平、江月院の僧侶、徳充、魯道、そして今富村には、御領組大庄屋の長岡五郎左衛門、高浜村庄屋で元今富村の庄屋の上田源作（宜珍）、江月院の隠居の海雲と今富村にある末寺普済庵の格道であった。

大江村と崎津村の吟味からは大江組の大庄屋で大江村の庄屋を兼ねる松浦四郎八や崎津村の庄屋吉田宇治之助は外されていた。本来であれば、大江組の大庄屋松浦四郎八は探索の先陣を切る立場にあった。しかし、川鍋は、曳き船支援銀着服の疑惑のある吉田や心得違いの者の疑いのある松浦を吟味からはずした節がある[81]。しかも、大庄屋

が心得違い者であることが発覚すれば、それこそ藩の存亡にも関わる大問題にもなりかねないトップ・シークレットである。このことは最後まで口外されることはなかった。

山方の江間新五衛門と福連木村庄屋の尾上文平は、大江組大庄屋松浦四郎八と近しい姻戚関係にあった。平井為五郎はコーロス徴集文書の平井与右衛門以来の転びの家系と関係があったと思われる（表1参照）。吟味方も古キリシタンの雰囲気の中にあったのである。ただ上田宣珍のみが異質であった。

川鍋次郎左衛門は、高浜村ならびに下田村、早浦村、亀浦村にも心得違いの者がいる様子だと聞いていて追々取り調べるつもりだと中老羽太十郎左衛門に報告している。しかし藩に余力はなく、高浜村の吟味だけが追加で実施された[82]。川鍋は、実質的な吟味の立案者である大竹仁左衛門と庄屋上田源作との結びつきを問題とし、高浜だけは取り調べをしたかったのであろう。結局、一町田組そして転び切支丹と類族が存在した久玉・早浦・亀浦・魚貫、さらには牛深茂串の古キリシタンは、権力によってかき消されたのである。

(6)　吟味過程

吟味は、村の古キリシタン組織の幹部との交渉、村内での組織的対応、そして富岡役所での個別吟味、という三つの過程を経て、そこでの取り調べから漏れた者、すなわち、富岡役所の呼び出しに出頭しなかった者、世帯内で13歳より上の者、心得違の家から嫁いできた者への補充調査へと進んだ。

村の幹部との交渉には、上田友三郎が作成し1804年（文化元年）2月に富岡役所に提出した「報告書」が使用された。そこには、村々の指導者（頭立の者）の名前、一年の暦が降誕祭に相当する11月の冬至に始まり、「悲しみの節」という四旬節を経て「上がり」の復活祭に至ることや七日を単位とした一週間というキリスト暦、祭儀と肉食、指導者の墓は崇敬の対象となる「善者様の墓」といった吟味の結論がすでに記されていた。ただ友三郎が記録した暦は今富村のもので、第三段階の個別吟味の過程で大江の上組と同じであることと大江の下組との違いが明らかにされた。

村々の対応は、その村の在り方を示している。その対応は、大江村が49人の頭百姓の寡頭制[83]、今富は迫共同体連合[84]、崎津は個々の自立性の強い網元の集合体[85]、そして追加調査となった高浜村は上田支配の領主制的村[86]であったことを示している。そして、そのいずれにおいても取り調べは難航した。以下、大江村を例に検討してみよう。

大江村では、3月22日から26日まで、大江八幡宮の境内での村民集会と、それとは別に指導的な百姓の間で寄合が開かれ、取り調べには応じないという村の方針が決められた。そこには、殺されるという恐怖が漂っていた。その間の状況を、上田宣珍を通して大江に送り込まれた島原藩の隠密、山川龍助は隣接する借家で観察して上田を通して報告書を役所に送っている[87]。その報告を受けて動かないと判断した奉行川鍋は、4月からの富岡役所への、個別呼び出し吟味を決定し、実行に移したのである。

そしてこの4月、本格的には5月からの富岡における個別吟味での証言から天草の古キリシタンの信仰形態が明らかにされた。しかし、それらの史料は、「友吟味」とも称される、恐怖心が根底にある相互告発を含む状況の中でうまれたものであることを意識した史料批判が必要である。

教会組織を検討する際に、重要なのは暦の運営（宇宙観の表明）なので、暦を中心に検討する[88]。暦は、長崎、外海や五島で使用されていた「バスティアンの日繰り」のような復活祭を起点とするものではなく、降誕祭を起点とする平戸系の暦であったが、土用中寄（どようなかより）のような信徒の指導者集会での協議がなく、帳方のような役務者がいる点では外海的でもある[89]。その意味では、平戸系に外海系が付加されたハイブリッド

ともいえる。但し、これは弱い作業仮説にしかすぎない。

組＝コンフラリアの最も大事な仕事は、暦の運用であった。暦は、大江村の尾之河内の帳方の幸左衛門が、5月8日に富岡の個別吟味で明らかにした。

史料9（計算のためにローマ数字表記にしている）

「上組に関してですが、354日とは霜月祭りの日（冬至）から翌年の霜月祭りの日までの日数です。加えて10 日ほど（たりませんので）、3年目に閏月を設けましてひと月30日とします。...364日の内、55と申しますのは、霜月祭りの日から数えての55日でして、56日目の初日より49日間を「悲しみの入り」（四旬節）と申します。この49日ですが、49日目を「上がり祝祭日」（被昇天の日）と申します。(55日と49日を足して) 104日を (364日から) 引きますと残りは263日になります（残而二百六拾三日：正しく260日）。この263日ですが、ここから、ドミンコ（主日）から7日毎に37回繰っていきます。そうすると259日になりますので一日足りません（是ハ三十七度どみんこヨリ七日七日くり候得者、弐百五拾九日ニ相成一日過ニ相成申候）。しかし、月の大小により足りないことがない年もあります。どみんことなった日を霜月祭りの日といたします。一日分足りないときは二日目（つまり260日目）をドミンコ、霜月祭りの日と定めるなどして繰り合わせをしております

下組につきましては同様ですが、364日の内55日を悲しみの入りまでの日数とします。49日ですが、上組では49日目のドミンコの日を「上がり祝日」しますが、下組は46日目のせつた（金曜日）の日を「上がり祝日」とします（下組ハ四拾六日目せつたニ相当り日をあがり祝日）。4日間の余分は、セッタの月、ドミンコしくんたなどで、繰り合わせを行います。従って上組と同じです（右四日之過はせつたのつきとミんこしくんた等次第ニくり合セ年中日くり仕候を以、上組と不同ニ而御座候）。」[90]

史料9での上組の幸左衛門の最初の説明は、大陰大陽暦のそれであるが、実際に運用されていたのは、グレゴリウス暦の変種である。霜月祭（降誕祭）とされた冬至の日曜日から霜月祭の前の土曜日までの364日52週間を一年とするものである。しかし、これでは一日足りない。この点を幸左衛門は「一日分足りない分は、二日目を霜月祭とする」として、一年を365日として計算していたのであろう。冬至自体も年によって一日の差が発生することからも、冬至を霜月祭りの日曜日に固定して、一年の最後を「それなりに」調整していたのかもしれない。降誕祭を基準とする生月のように、冬至直前の日曜を降誕祭としていたのかもしれない。さらに、幸左衛門の供述を書き写した役所側の誤記の可能性もあるかもしれない。

幸左衛門によると、霜月祭りから56日目からの49日目が「悲しみの入」（四旬節）で、上組はその49日目の日曜日を「上がりの祝日」（復活祭）とし、下組はその46日目の金曜日を「上がりの祝日」としている。この説は奇妙で、しかも46日目は木曜日だから、彼が下組の暦を理解していたかどうかは疑わしい。

上組と下組の暦法を説明した幸左衛門は、洗礼名ジュアン（寿庵）、日繰りを行う帳方で、彼は「霜月（降誕祭）の日繰りを承知し、村の内外に祭りの日を知らせていた（霜月祭日繰様之事承知致候由得斗承届ケ申越候様、尤右祭リ日之儀、村内外々エ幸左衛門相知セ候儀エ者無之也）。しかし、彼は下組の暦については大きな誤りをしでかしている。「下組は46日目のせつたの日を「上がり祝日」とします」というが、46日目は木曜でクインタになり、復活祭の聖金曜日（セッタ）と混同されている。下組には別の帳方がいたのであろう。幸左衛門の一週間理解は誤りがあった。これに対して崎津のそれは正確で、下組の帳方は崎津にいて、上組とは復活祭の週をめぐって、異なっ

表5　上組と崎津の曜日名（『上田友三郎日記』より）

	木曜日	金曜日	土曜日
上組	クワイタ	サバタ	セッタ
崎津	キンタ	セッタ	サバタ

＊日曜日から水曜日までは同じ。

た運営がなされていた、と思われる[91]。

今富村の暦は、大江上組と同じであり、高浜ではくずれの前までは大江の上組に日繰りを聞いていたが、くずれの時には、冬至を11月15日、復活祭を2月15日と固定してしまった[92]。幸左衛門は上組の帳方で触れ役であろう。上組は、「古寺様」を観念的な中心とした高浜―大江―今富、の信徒団から成っていたと考えられる。ただ、帳方の数に関しては不明である。幸左衛門は大江村の尾之河内の嘉助の名子でオラショの記憶方でもあった（大江村幸左衛門儀、嘉助方ェ被頼経消之唱等致候由相聞候、外々ェも相頼参り経消等致候儀ニ者無之候）[93]。嘉助は経消を唱え、葬儀を行う水方であった。幸左衛門は尾之河内の迫が、頭百姓の嘉助と幸左衛門等の名子からなる小組を構成し、その小組の連合体が上組を成していたとすれば、水方と帳方も複数存在していた可能性がある。

下組は、布教期に存在した崎津の教会を観念的中心に、唐崎などの大江の海方と崎津、そして羊角沿いの亀浦や早浦、さらには海沿いに牛深茂串などの集落からなっていたのではないだろうか。大江下組の水方は山伏といった。彼は湾内や海辺山伏として巡回していたのであろう[94]。

小組は本百姓と名子の地主―小作人あるいは網元―乗子関係を内包していた。組＝コンフラリアは、塚（チャペル）で信仰を守る小組から構成されて、この世とあの世の「時」を管理していたのである[95]。組の地理的範囲は、権力の抑圧の強度で変動していたであろう。宗教組織の地理的範囲は流動的であったが、江戸幕府の行政村の境界は越えていたであろう。

個別呼び出し吟味のもう一つの大事な点は、世帯ではなく、個人的を単位として吟味が行われたことである。個人の呼び出しが可能となっていたことである。天草の人口は江戸期を通して右肩上がりに増加し[96]、その中で名子や従兄弟などを含む拡大家族あるいは兄弟間の結合家族は解体し、単婚小家族化が進んでいた。個別吟味は、この世帯の小型化によって可能となったのであろう[97]。家の子や名子の世帯が大家族から押し出された。文化2年を境に「宗門改め帳」は、分厚いものとなっていった。これは、記載方法が改まったためと考えられる[98]。

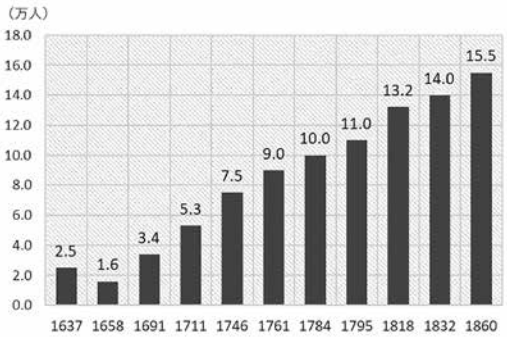


図12　天草の人口推移

典拠：董振江「天草の人口問題」p.184、表1より。

高浜村の取り調べは、6月1日から大江村を担当した江間新五衛門たちが行ったが、上田宣珍は、大江村と隣接する白木河内をスケープゴートにして摘発を最小限に抑えるために奔走した[99]。

(7)　追加調査

追加調査は、8月に川鍋たちが高浜村で、地元の庄屋や村役が中心となって取り調べをした帳面を照合してまとめたものである。崎津村の庄屋吉田宇治之介は村年寄りを連れて、大江村の大庄屋松浦四郎は村役ともに、帳面の引き合わせに高浜に来た。こうした手作業で、心得違いの者の数は机の上で決められたのであろう。白札付書上帳は、本吟味で漏れた人々が含まれている。この本吟味

で漏れた分にこそ、古キリシタンの原風景が現れている[100]。

地元の庄屋の聞き取りで心を開いたものであろう。大江での証言で以下の事が判明している。まず、史料10のすゑ親子をみてみよう。そこから、心得違いということは周囲が知っていたこと、それでも、周りが心得違いであることを知っていることと、それが公になることは別で、公になることは、むしろ恥と考えられていたことがわかる。しかし、すゑは、公になったのであれば、一人だけ逃げることはせず、「心得違いの者」の列に入れて欲しいという積極的な態度も表明している。「古キリシタン」であることは、彼らのアイデンティティであった。「隠れ」とか「潜伏」とは権力からの網掛けで、共同体の中では、「語らない周知の事実」であった。そして権力にとっても「監視する周知の事実」であった。そしてここで、古キリシタンの間での受洗や名付け親の儀式が、具体的に確認できる。

史料10

「右のすえの両親共に心得違いの者です。夫の政右衛門は右の人たちが申し出た通り、心得違いの者ではありません。右すゑ親子三人は心得違いの者だと近所の人も知っています。右の友左衛門の女房のせは子どもが生れた時、すゑを連れて水授けをしてくれるように頼みに行きました。その場所に居合わせた人も心得違いの者です。：右すゑ両親共ニ心得違之もの二御座候、夫政右衛門儀者、右之者共申出候通、心得違之もの二而無御座候、右すゑ親子三人之儀者心得違仕候儀、近辺之もの茂存居候事二御座候、右友左衛門女房のせ子出生之節、すゑ召連参、水授抔付呉候様頼二参、其座二居合候もの茂御座候」（「松浦家文書」）

史料11の戸主の嘉蔵［116］も、代々の心得違いの家で、村で公になることは、恥と考えていた。それでも、知られた以上は、すゑと同じく心得違いとして生きる選択をしたのである。ここには、降誕祭、復活祭、祭日に牛肉を食していた、ことが表明されている。

史料11

「家頭　嘉蔵[101]　47才　吟味は済んでいます。

右の嘉蔵は先祖代々兄弟も残らず心得違之者です。ところが、白札付に申し出るのは世間に恥ずかしいと思っていたので、これまでは面倒と申し上げてきましたが、前述した通り、先祖兄弟とも心得違いの者なので、自分一人だけ逃げるのは難しく、この度、心得違之者の人数に書き入れてくださるように申し出ました。：御吟味相　家頭嘉蔵　四十七　右嘉蔵儀、代々心得違之もの二而兄弟不残、心得違二御座候、然ル處、白札附二申出候儀者餘世間二恥ケ鋪存申付、是迄面倒之儀申上居候得共、前断之通、先祖兄弟共不残心得違二御座候得バ、其身壱人何分難逃、此節心得違之人数二書入呉候様申出候」（「松浦家文書」）

心得違でない者が、心得違の者の敷地内に住み、両者の生活習慣に違いはない事例もある。史料12の上組の弥七と幾蔵の二人の兄弟は[102]、共に暮らす結合家族をなしていた。心得違いであることは周囲も認識していて、村落内であれば儀式慣行は隠すことはなかった。弥七は、敷地内に（名子の）家族である松之助を抱えていた。松之助は心得違いではないことは周囲も認めているが、生活慣習は、暦に始まり、降誕祭、四旬節、復活祭を祝い、牛肉を食するという古キリシタンのままであった。ここには、「個別吟味」の限界が描かれている。「心得違いの者」かどうかは村や当人の認識に依存する部分があり、グレーゾーンの幅が大きく、吟味方は、その違いを正確には把握できなかったであろう。ましてや、心得違いの正確な数など算出はできないはずである。

史料12

「(幸兵衛倅弥七と幾蔵兄弟) 右の者たちは間違いなく心得違いの者で、そのことを周囲の人たちも知っています。ただし先祖も心得違いの者ではありませんが、弥七の両親も心得違いの者です。牛肉なども家族で用い、霜月、二月、祭日も弥七はもちろんのこと家族も遠慮せず祝っています…心得違いの者でないと聞いています。(弥七家内より別家　松之助)　右の松之助は親の代から心得違いの者ではないと聞いています。牛肉などを用いています。さらに霜月、二月、祝祭日に少しも遠慮せず、心得違いの者のように信仰を行うことを近所の人も知っています。：右之者共心得違ニ相違無御座候段、近邊之もの存罷有申候、尤先祖者心得違之ものニ而者無御座候得共、右弥七両親共ニ心得違ニ御座候、牛肉抔茂家内一統相用候由ニ御座候、霜月、二月、祭日茂、右弥七者勿論家内之もの共ニ茂遠慮不仕、祝抔仕来申候…心得違無之者相聞候　弥七家内ゟ別家　(松之助　三十一) 右松之助儀、親代ヨ利心得違之ものニ而ハ無御座候得も、牛肉抔も相用、尚又霜月、二月、祭日ニも近辺之ものも同類之様ニ存居、少も不憚、祝日抔仕居候」。(「松浦家文書」)

1808年 (文化3年)、川鍋次郎左衛門と大竹仁左衛門が江戸に赴き幕府への報告のすり合わせを行い、8月に藩は伺い書を提出した。そこでは、心得違いの者の数は、5100名となっていた。翌1809年に下された幕府の裁定は、「全員許す」というものであった。これは1804年の時点で決まっていたことであったことは前述の通りである。しかし、天草側に残る史料には心得違いの者は、5205名とある。そして、それを書き留めた人物は、上田宣珍その人であった[103]。彼の書き出した大江村の心得違いの者は、2132人である。しかし、大江村吟味日記をみても確認できるものは重複を含めて381人しかいない。これでは全員調査ができたかどうか疑問が残る。この乖離は、5205人という数字がデスクワークの結果であったことを示唆しているのではないだろうか。

おわりに―海域天草の生業と産業化―

1805年 (文化2年) 12月4日、上田宜珍の跡取り作七は島原藩から大江組大庄屋見習いと高浜村庄屋見習いを任じられた[104]。大江組大庄屋松浦四郎八を差し置いてのことである。上田家が大庄屋職を継ぐというのが、天草くずれでの宣珍の直接の狙いであった。その狙いは、通行手形の発給による国内交易と交通の自由の獲得にあったのであろう。しかし、宣珍の狙いは、結局、彼一代限りの名誉大庄屋職で終わり、松浦四郎八と穀助と繋がる松浦家が潰されることはなかった。それは、まさに「鎖国」時代を迎えて、大江を本拠地とする松浦家の海民統制力と軍事力を、海防上幕府は必要としていたことと[105]、御領の豪商石本勝之丞などと結びついた抜け荷ルートの掌握をしていた可能性を指摘しておく[106]。

上田宣珍は、文化年間から、陶石と磁器[107]の販売と、鰯と鮪による商業的漁業をより広範に進めようとしていた[108]。陶器や陶石の積出湊としては、高浜は不安定で、軍ヶ浦を利用していた[109]。同時に、彼は高浜の漁村化つまり定浦化と崎津の廻船基地化を狙い、長崎とその先の五島を見据えていた[110]。一方で、大江と軍ヶ浦は、天草灘から甑島にかけての鮪と鰹漁の漁場圏域を有していた。前述した牛深の茂串は鮪漁でこの圏域の中にあった[111]。1773年 (安永2年) に問題となった牛深茂串の心違いの者たちの中には、海と漁を通して「転切支丹並類族死失帳」にある大江の新四郎系の子孫が含まれていたのではないだろうか。茂串の古キリシタンは、安永2年までは、崎津―大江の下組に含まれていたであろう。

天草くずれは、先駆的な内国産業資本家上田宣珍[112]と統制交易外にいたフリーランサー松浦家との争いという側面をもっていたのである。しかし

それは、中国を核とした海域東アジア、あるいはその東端の海域九州という磁場の話であった。しかし、この中国を中心とした経済交易圏に巻き込まれた海域天草が、日本における近代の産業化に貢献することはなかった。時代は西欧とアメリカそして太平洋を向いていた。

天草くずれは、高浜、大江、崎津、そして今富の四つの村に大きな傷を残した。四つの村は分断化された。相互の関係性は薄れた。とくに崎津と今富の、魚と農産物の交流による姉妹集落「冨津」は崩壊した。大江村は49人のキリシタン百姓が、大江八幡宮と結びつき鳥毛を奉納する氏子となった[113]。大江の松浦は漢学に傾倒し[114]、高浜上田の国学に対抗したかのようにすらみえる。荒尾岳をはさんで北と南に異なった鄙の世界が生まれたのである。一人今富村のみに矛盾が集約された。村を巻き込んでの合足組の騒擾は[115]、その文脈で考えるべきである。

まことに天草くずれは、地元にとっては未曽有の「大津波」であった。しかし、幕府にとっては「さざ波」であった。1856年（安政3年）の「浦上三番くずれ」のさい、長崎奉行は天草くずれのことを西国郡代に問い合わせている。奉行所が知らないのも驚きだが、郡代池田岩之丞の回答には言葉を失う。回答は「天草の一件の起こりは、大江村の（あの帳方の）幸左衛門（達6人）が家々で引き継いできた異宗を信仰したことにある。大江村の嘉助ほか30人が同様の（怪しき）信仰をした。[116]」というのである。幸左衛門と嘉助は、トリックスターにしたてあげられた。天草くずれが、「弾圧に耐え信仰を守った」という大きなストーリを獲得するのは近代に入ってからなのであろう。それも、「大学」という近代の知的専門機関の目を通してそうなのである。

「キリシタンの伝来によって日本は真の意味での始めて世界史の舞台に登場した」のである。キリスト教の歴史が、個別史学としての「単なる教会史」に終わらないためには、「国内的情勢の高度の史的研究と、内・外史料の吟味と世界史的視圏に立」つ構造史的視野を獲得して「始めて全うされる」のである[117]。

16世紀から17世紀の大航海時代になって、キリスト教の「世界性」は具現化された。それも、権力者や身分の枠を一定度超えた巨大な流れとして

表6　大江村の私塾

	塾長名	小字	開設時期	塾生数	備考
1	岩本勝助	西	1830年（天保元年）	10名	岩本家　†
2	松浦穀助	里	1830年（天保元年）	26名	大庄屋　†
3	松浦半三郎 松浦可一（子） 松浦恭九郎	野中	1832年（天保3年） 1854年（安政元年） 1870年（明治3年）	17名 13名 11名	松浦家分家
4	田口善作	浜里	1833年（天保4年）	10名	†
5	赤崎傳内 赤崎嘉七郎	浜里	1834年（天保5年） 1858年（安政5年）	15名	†
6	木下中満 木下忠善	横浜	1937年（天保8年） 1865年（慶応元年）	30名 15名	大江八幡宮宮司
7	大西倒次 大西訓造（子）	軍ヶ浦	1844年（弘化元年） 1856年（安政3年）	9名 26名	(†)？
8	長谷場順造	唐崎	1848年（嘉永元年）	10名	漢方医
9	丸山竹四郎	田淵	1858年（安政4年）	4姪	†　山下家親族
10	池上家也	向辺田	不詳	不詳	不詳

†古キリシタン『熊本県教育史』（熊本県教育員会、昭和6年）　†古キリシタンの家系。

そうなのである。東アジア世界においては、「世界性」の体現は、あくまでも最高権力者の属性であった。キリスト教布教によるこの思想革命に、時の権力者は、大陸侵略、あるいは「世界」の限定的独占（日本的海禁）という対応をしたのである。キリスト教という異教は世界性を失うことで「キリシタン」という異端となった。

（以上）

付録

＊原典からの引用は、論点の展開で必要な個所で行い、必要な場合には修正した。史料解題はポントを下げておこなった。

付録１　平戸の鉄砲衆は、1560年という早い時期にもかかわらず、20人、30丁で構成されるという、他に類をみない程の強力な装備で、しかも集団訓練も充分で、その練度もきわめて高かった。まさに戦闘的海民集団だったのであろう。「大村殿の依頼で平戸松浦氏から鉄砲衆20名の応援と」言われたので（気前よく）30丁ほど、協力することとした（「てつほう衆二十人をはかり御加勢候へとありけれは、てつほう三十ちょうほと合力なされける」）。各地の勢力は、鉄砲を5丁や3丁くらい所有するところもあったが、持っていないところもあって、また持っている勢力でも使い方をあまり知らず、音を鳴らすばかりで命中させることは知らないようであった。平戸の鉄砲衆は、訓練での標的で、飛ぶ鳥や駆ける鳥に命中させてきた」『大曲記』（筆者未見）、天草市立天草コレジョ館編『Amakusaと九州西海岸のNANBAN』（2022年）、p.9より。

付録2

1569年10月22日付、日田発信、ルイス・デ・アルメイダ修道士のニセヤの司教ドン・ベルショール・カルネイロ宛の書簡[118]

＊本文中で使用した部分と重複するところがあるが、手紙の流れを理解するためにも関係個所全文をあげた。付録3も同様である。尚使用したEvora版のファクシミルは、綴じしろの部分が読みづらいが、1598年のものということもあり、そのまま再現した[119]。これも付録3も同様である。必要な箇所のポルトガル語を（　　）内に補足した。〔　　〕と下線は筆者のものである。

363頁（松田監訳の頁）；pp. 280r（Evora版の頁）.

2-(1)「…私〔ルイス・デ・アルメイダ修道士〕は天草〔の土地〕の領主〔天草鎮尚〕のもとに赴いた（Eu me fui pera o senhore de Amacusa terra）。彼は私が領地に（来ることを）大いに望み、②彼の館の傍にある一寺院に（...hua varella juto de suas casas…）私を泊まらせた。二十日が経過して挨拶した後、私は彼の真意を知るため、辞去することを望む素振りを見せたところ、彼は私が立ち去ろうとするのを深く悲しみ、自ら聴聞を怠り、家臣らに聴聞させるべく配慮が足らなかったことを遺憾とした。④また彼は家臣が聴聞し、望むならば、キリシタンになる許可を与えた。」

次の点は考慮すべきであろう。①アルメイダは天草鎮尚を、後に呼ぶときに使用した殿や名前でなく、セニョール、領主という一般的な言い方をしている。しかも、アルメイダは鎮尚に招待されたというよりは、リアンという洗礼名をもつ河内浦の「指導者」(regedor)が招待したように思える[120]。②鎮尚は、アルメイダを館の傍の寺に宿泊させた。館は河内浦城であろう。とすると、寺というのは、後に崇円寺となる場所であろうか。実は、河内浦には一向宗の庵があり、その可能性は少ないが記憶はしておこう。③宿泊したのはいいが、鎮尚は積極的にキリスト教の教義を聞くことも、キリシタンになるつもりもなかった。③最初の面会まで20日間（別の手紙によると2ヶ月間）、アルメイダは時間を浪費している。鎮尚の消極さは、やがて明らかになる。いずれにせよ、リアンが面会のお膳立てをしたと考える方が自然である。しびれを切らしたアルメイダは、帰るそぶりを見せて、ようやく面会にこぎつけている。そしてここに至って鎮

尚は、自分はおいて、家臣がキリシタンになることは認めた。

2-(2)「⑤私〔アルメイダ〕は所領を治めているのは家臣たちであり、彼〔天草鎮尚〕にはほとんど力がないのを認めたので、領内に留まるに当たって、五つの事を求めた。第一は領内にデウスの教えを弘める〔広める〕ことを満足とする各砦の主（A primeira hum assinado dos senhores das fortalezas）の署名した文書であり、第二は彼がその家臣らの信奉すべき教えをしるための八日間説教を聴くこと。第三は、もしデウスの教えを好ましく思うならば、キリシタンらが自分たちの頭として仰ぐため、彼の息子の一人をキリシタンにすること。⑥第四は、彼の所領に教会（igreja）を建てるため、その用地を与えること。⑦第五は同地より志岐までの七里〔レグア（約35㎞）〕の海岸に（sete legoas de costa）キリシタンになることを許す御触れを出すことであった。以上の事柄を彼に求めたのは私が所領に留まることを彼が望んでいるのを認めたからであったが、彼（鎮尚）はこのすべてを承諾した。」

⑤は、当時の天草氏の、地域豪族の連合という権力構造を示している。北の宮地岳氏と南の久玉氏との合同がなったばかりで、天草鎮尚は、強権的な統合能力を欠いていたし、それは第三者のアルメイダの目にもはっきりと映る程のものであった。従って、布教には各地の小さな城に跋扈する地域豪族の同意を必要としていたのである。そのような構造的な状況で、リアンを中心とするキリスト教布教に積極的な派閥と、それに反対する派閥の対立があり、鎮尚は全体のバランスを考えながら行動していたためアルメイダに対して消極的な態度をとらざるをえなかったのであろう。⑥⑦それでも、布教派の圧力で、鎮尚はキリスト教を受け入れる決断を下した。そして一町田と崎津での教会の建設と、都呂々までの約35キロメートル海岸地帯のキリスト教化を認めた。おそらくは、この地域が、鎮尚の勢力圏であったろう。

2-(3)「かくして説教を聴き始め、十日間聴聞して（人間が神により）いかに救われるかを十分に理解し、彼の家の人々も聴聞を始め、(364頁）私〔アルメイダ〕は洗礼に取り掛かった。最初の受洗者は⑧同地一帯の執政官〔彼の土地の指導者〕であり（regedor de tota suas terra）[121]、その家族〔世帯〕（con sua casa）およそ五十名を伴ってのことであった。次いで、⑨彼の義父が約百二十名の人と殿の家臣多数を伴って受洗した。また、私は⑩同地の郊外を巡って〔村の郊外を歩いて〕、〔道行く〕四百余名に洗礼を授けたであろう。これは、ドン・リアンと名付けた〔という洗礼名を与えられた〕、かの執政官〔指導者〕より受けた多大な援助により行われたことであった（& daqui andei pelos arraboldes desta terra, onde bautizaria (sic) passante de qut tro centas almas, & isto se fazia pola grande ajuda que tinha em dom Leão, que assipus nome ao regedor）。領内はことごとく動かされ、受洗を望まぬものはなかったが、この時、悪魔は我らを激しく迫害すべき動き始めた。」

ドン・リアンが、アルメイダが来た時にキリスト教徒であったかどうか不明だが、1560年以来、キリスト教徒になろうとしていたことだけは確かであろう（後述）。⑧執政官は誤訳に近く、そのような役職は存在しなかったし、家族もcasaの日本語としては誤訳に近く、家の子郎党を含む世帯と考えるべきであろう。⑨日本名は不明だがドン・リアンは、松平隆信の命を受けて、鉄砲衆をひきいて（後述）平戸から天草に来た。そして、その後一町田に来て在地の有力者の娘と結婚し、⑩村の中心地から離れた、例えば、平野、葛河内、市瀬村、津留村などに拠点を持っていたのではないだろうか。この「郊外」の布教の下準備は実質リアンが行った。布教の速さと容易さや、「多大な援助があった」という表現はそれを暗示している。

２-(4)（p. 280v）「領内の仏僧らは殿の二人の兄弟（⑪大和守と刑部大輔）を招いて、我らとデウ

スの教えについて数々の悪口を言い、殿の兄弟らはドン・リアンを殺すため領内の大身らを招集した。というのも、⑫彼〔リアン〕が諸人の心を動かしてキリシタンにならせていたからである。彼が死ねば…デウスの教えも一掃される（ものと考えた）からであった。これは秘密裡に行われ、⑬ある晩、殿の兄弟らは重立った人々とともに七百名の武装兵を率いて某寺院に集まった（hũa varella com sete centos homes armadas）。これは夜明けとともにリアンの家を襲って彼を殺し、その義父もはなはだ重立った人なるが故に殺すためであった。」

⑪鎮尚の二人の兄弟、天草三郎大和守種満は下田城の鎮守、刑部大輔は、後に相良氏の家臣となる。⑫二人が問題としたのは、リアンが、キリスト教布教の下準備をしていたことである。彼に必要なのは聖職者だけであった。その聖職者が来て、正式の布教が進むことに危機を感じた、⑬二人は、軍勢をおこし、七百人の武装した家臣や地下（じげ）の人々を寺に集めた。この寺は下田城の傍にあった天台宗（後の浄土宗）信福寺であろう。下田城は南の久玉方面を向いていた。その後、大和守や刑部大輔が久玉城に籠城し、島津義久や義虎、相良義陽へ傾倒していくところからも、大和守と行部大輔が旧久玉氏や長島氏の勢力と関係があった可能性もある。

2-(5)「⑭彼らは（寺院を）出るに際して〔出陣するに際して〕、まず殿に使者を送り、ドン・リアンは国にとって有害なる故、彼ら一同、彼を殺すため参集したのであり、これを承認すべきことを伝えさせた。これに対して殿は、もしリアンが死ねば彼もまた死ぬであろうと返答し、直ちにドン・リアンに使者を遣わして事態を知らせた。これはいとも迅速であったため、⑮全キリシタンがドン・リアンのために死すべく僅かな時間で彼の家に集まった。すべてのキリシタンが彼に寄せている深い愛情は真に驚くべきもので、婦人や男女の子供がおのおの所持する最良の衣服を着て、キリストの信仰のため死のうとしてその家に入った。というのも、キリシタンはことごとく殺されるとの噂が流れていたからである。」

⑭河浦の騒動は、最初はキリスト教導入を巡る、大和守と刑部大輔一派とリアンとその支持者の争いで、鎮尚は板挟みにあった。しかし、心はリアンたちに傾いていたようである。大和守と刑部大輔一派が攻撃することをリアンにすぐ伝えている。⑮それを受けて、リアンの家に集まった信徒は、その行動の速さや数、「リアンのために死ぬという」覚悟を考えると、アルメイダが来る前から洗礼は受けていないがキリスト教の教えを知っていたリアンの領民が中心であったろう。

2-(6)「反対者〔たち〕は、リアンが死ねば己も死ぬという殿の伝言を聞くと、一人の重立った仏僧〔旧信福寺住職か〕を介して、リアンが死ぬことを認めるべきであり、⑯もしそうしなければ自ら〔鎮尚〕死ぬようにと伝えさせた。彼〔鎮尚〕は仏僧の助言により彼ら〔反対者〕が自分に従わないことを知ると、この件から手を引き、ドン・リアンの庇護をやめた（não fauorecendo dom Leão）。⑰同仏僧は殿の兄弟らと国の重立った人の名代として、リアン（365頁）に腹を切らせるため、彼の家に赴いたが、この時すでにドン・リアンは六百名の武装した人々を擁し、鉄砲用の銃眼を備えた大きな柵を板で〔木と竹による[122]大きな柵を〕造っていた（tinha Leão seis centos homens darmas, & tinha feito grandes tranquerias de tanoado com suas seteiras pera as espingardas）。仏僧はこれに驚き、リアンは彼に、待ち構えているので（攻めて）来るようにと答えた。」

⑯ここで、騒動は、クーデタの様相を呈してくる。しかし大和守と刑部大輔たち反対派の強硬な言葉に、鎮尚は手を引きリアンへの恩顧を取り下げている。この言い方から、すくなくともリアンは家老のような鎮尚の世帯の重臣ではない、部外者であることが推測される。鎮尚

は、内乱になることを恐れ、リアンを切り捨てた。反対派の攻撃準備は整ったわけだが、そうはならなかった。⑰リアンの館は、おそらく木と竹で編まれた鉄砲用の銃眼を備えた柵が作られ要塞化していた。リアンは、武装集団としての鉄砲衆を擁していたのである。これでは勝負にならない。ここから、彼が、1560年に松浦隆信が派遣した鉄砲衆の頭であった高い可能性を指摘できる。

2-(7)「⑱反対者たちは、仏僧が述べたことに対して非常な恐れを抱いたので、あえて攻めることはしなかったが、彼にキリシタンを止めて（異教徒に）立ち戻ること、および、もし承服しかねるならば、国から立ち去ることを申し入れた。彼はこれに対し、何事であれ⑲〔貴方の〕国主（seu Rei）〔鎮尚〕以外には服従しないので、彼らの命令でそのようなことをするつもりはなく、国主が命じるなら実行するであろうと答えた。仏僧らは殿のもとに行き、殿がリアンに平和のためしばらく（国から）去るよう助言すること（を求めた）。国主は彼にこの助言を行い、⑳彼〔リアン〕は妻子と約五十名の家臣〔（下僕）（criados）〕を伴って、〔彼が、〕所有していた大船に（elle se ausentou embarcandose em hum navio grande que tinha）乗り立ち去った。天候が非常に悪かったにもかかわらず、私の助言により、口之津（Cochinocu）がキリシタンの町であることから同所に向かい、今では我らの主なるキリストへの愛により追放された彼の義父とともに滞在している。㉑かくしてこの地は幾分平穏に帰したが、私には悪魔がこれをもって終わりとするようには思われず、（再び仕掛けて）来るものと判断したので、一人のキリシタンに書状を託して、豊後の国主（Rei de Bungo）〔大友 義鎮宗麟〕のもとに派遣し、（私が）同地に滞在しており、その地の領主〔鎮尚〕に宛てた国主の書状を必要としていることを伝えた。」

⑱勝負にならないとみた反対派は、リアンに対して河内浦から退去するように求めた。リアンは、国主の命以外は聞かないと、反論した。そこで反対派は、天草鎮尚にリアンに対して退去するように助言を求めたのである。⑲ここで、リアンは鎮尚を貴方の国主とよび、反対派は殿（Tono）と呼んでいる。ここでは、リアンは鎮尚を殿とは呼んでいない。松田翻訳は、seu（your）を省いたので関係性が見えなくなってしまった。ここからもリアンが、天草氏の元々の家中ではないことがわかる。⑳tinhaの主語はリアンである。リアンは自分が所有している大船で、50人の世帯（家中）とともに口之津へ撤収した。彼は、大船を倭寇巣のであった軍ヶ浦あるいは崎津に係留していたのであろう。ここであれば、反対派の手は及ばない。これは、リアンが、大船を操る海民、それも倭寇と関連のある平戸あるいは生月の海民の流れをくんでいたことを示す重要な点である。㉑リアンの退去で、直接の対立はなくなったが、リアンという後ろ盾を失ったアルメイダは、布教を続けるために、豊後の守護でキリスト教に理解のあった大友宗麟（彼自身の受洗は1578年の天正6年7月）に布教の手助けを依頼した。ここから、天草での布教を巡る「河内浦合戦」は、九州の戦国大名の対立を背景とする第二段階へと突入したのである。

2-(8)「彼〔宗麟〕はさっそく、私〔アルメイダ〕が（使いを介して）依頼させた通りの書状を私に送ってきたが、これには甚だ上等な緞子三反が添えられていた。書状は領主に遍くデウスの教えを弘めるよう強く求めるもので、(p. 281r) ㉒殿〔鎮尚〕はこの書状を大いに喜び、彼の家臣全員にそれを見せるよう命じ、私には従来通り説教するようにと伝えた。かくして我らはある町〔場所：崎津―大江〕で説教をおこなったが、そこでは五百名が洗礼を受けつつあった（e assi pregamos em hũ lugar a onde estauão quinhentas almas pera recebere o bautismo）。彼らが二十五日間説教を聴いた時、悪魔が仏僧らに乗り移り、皆が一団となって殿に向かい、私を領外に追放すべきであり、さもなくば彼らの方が一人残らず立ち去るであろうと言った。これによりキリシタンになることを決意していた人々に対して大きな障害が立ち塞

がった。というのは、殿が私に、まず差し当ってかの仏僧らの怒りを静まらせるべきであると言ったからである。殿は仏僧らに対しては、豊後国主に従わざるを得ないと言って弁解し、彼らに書状を（p. 366）見せて、好きにするがよいと（言って）帰らせた。」

㉒鎮尚は、アルメイダがもたらした宗麟の書状のみで、布教を認めて平和を獲得しようとした。この消極的行為が次の紛争の原因となった。松田翻訳はlugarを町と訳しているが、実情に合わない。アルメイダがリアンなしに無事に布教できた場所である崎津から天草灘にかけての西目筋であろう。しかし、500人の入信は反対派の怒りをあおってしまった。

2-(9)「諸人が豊後国主の書状に従ったので、もはや事は起こらないように思われたが、㉓この時、三名の大身が天草殿のもとに人を遣わして、領内にデウスの教えを入れさせないよう強く求め、さもなくば彼〔鎮尚〕に戦を仕掛けるであろうと伝えた。この大身らは殿の兄弟たちや仏僧らに買収されたのであったが、殿はこれに対して、その要求を受け入れるような伝言を送らざるを得ず、私には、彼の生命が尽きるか、あるいは所領がキリシタンのものとなるか（いずれかであるから）、安心すべきであり、また、すぐに彼らを（キリシタンに）することができないとしてもたいしたことではないと言った。」

㉓大和守、刑部大夫そして仏僧たちは、おそらくは薩摩当主島津義久、島津義虎、相良城主相良義陽[123]のそれぞれに書状を出して対抗したのであろう。いずれにせよ、河内浦の騒動は、九州の戦国大名の確執を背景に置くことになった。このなかで天草鎮尚は動揺し、アルメイダは布教を一時停止せざるを得なかった。

2-(10)「この問題は長引くと判断したので、私はおよそ五カ月間告白していなかったことから、コスト・デ・トルレス師のもとに行って同地の出来事について報告し、告白することにした。殿は私に馳走を饗して別れを告げ、その後、私が再訪した時、彼の長子と重立った者二名をキリシタンとし、かつまた十六の集落をことごとくキリシタンのものとするために私に委ね、さらに希望する者は誰でもキリシタンになることを許す旨の署名した書付〔証明書：licensa〕を私に与えた。この書付を受けて彼のもとを辞去したが、私の代わりに、㉔未だ教会（igreja）に迎えられていない二人の修練士（duos irmaos）を留め置いた。私が発った時、敵は私がすでに領外に出たのを認めると、殿に叛旗を翻し、我らの修道士らを追放するか、さもなくば彼を滅ぼすであろうと言った。すべての者が叛起していたので、彼〔殿〕は修道士に、敵の怒りを静めるまで口之津に去ることを請い、彼らはその通りにした。」

鎮尚は、豊後に戻るアルメイダに、空約束に近い布教許可書を与えた。アルメイダは、二人の修練士を河内浦と崎津の教会に残し、鎮尚の保護の下で信仰を維持しようとしたが、それもかなわず、二人は口之津に退去した「未だ教会に迎えられていない」とは、修道誓願を立てる前の若い修練士であろう。

付録3

1596年8月15日付、日本発信、ポルトガル人某の、ポルトガルのイエズス会の司祭および修道士宛の書簡[124]

3-(1)「（384頁：p. 286r）天草殿（鎮尚）と称する一領主は、領内でデウスの教え説かせるため、①ルイス〔デ・アルメイダ〕修道士を派遣するよう司祭に請うた（Hum senhor dum estado que chamauaõ Macuçã dono, mandou pedir ao padre que quisesse mandar a sua terra o irmão Luis）。同領主は六年近く前から（1563年）司祭にこの要請を行っていたので、ルイス修道士を派遣することにし、

彼は灰の水曜日、午餐後、大村を発った。」

この修道士は、鎮尚がアルメイダを招聘したとしているが、その後の叙述はアルメイダの書簡と同じである。鎮尚の招聘は、領主としての必要な形式で、実質はリアンが行ったと推測している。天草鎮尚からの布教交渉は1563年から始まっていた。ドン・リアンが河内浦に定住したとすれば、この頃であろう。①鎮尚はルイス・デ・アルメイダを知っていたようにも読めるが、アルメイダが布教を開始し、平戸周辺に展開したのが、1560年以降なので、キリスト教徒になろうとしていたドン・リアンが彼を招聘しようとした可能性が高い。尚、この修道士は天草をMakusaと表記している。

3-(2) 大村からおよそ十五里〔レグア：legoas〕〔約75㎞〕の天草（Chegado que foi a Makusa）に到着すると、②殿からは大いに歓迎されたが、彼の一兄弟からはいとも悪しき待遇を受け、彼らは修道士を崎津と称する港（p. 286v）〔hum porto que chamauaõ Xaxinocho〕に宿泊させることを決めた。...彼は己の意図を達成する前に幾多の苦難に見舞われたが、殿の兄弟を敵に回していることから...その苦難は...評価すべきものである。③〔アルメイダ〕修道士が、彼のために用意された殿の町〔一町田〕の一寺院に宿泊してから二ヶ月が経過したが（４月下旬になる）、修道士は己にとって好都合なこと以外は（385頁）何もせず、この間、修道士が必要としたのは、たびたび警鐘を鳴らすことと彼がはなはだ精通している多くの策略を用いることであった。然して、時には立ち去りたいと言って船を求めさせたり、また時には領内に滞在するのを望んでいないことを覚らせたので、殿は彼の求めていることを承諾した。そのうち二、三の事例を挙げよう。第一は、彼がデウスの教えがいかなるものであり、彼の領民が何を信奉するのか知るため、彼自ら聴聞すること。第二は、④執政官〔かの指導者〕が人々の頭に就くためキリシタンとなることであり（o regedor se auia de fazer Christão, pera ser cabeça delles: p. 286v）、さらに改宗すべき多数の貴人や十、乃至十二の場所の名を挙げ、その他多くの事柄を指示したが、殿はこれを許した。すべてを取り決めた後、修道士は仕事に取り掛かり、二ヶ月足らずで約五百名をキリシタンにした。」

②しかし、天草氏内部では、布教をめぐって鎮尚と兄弟の間での緊張関係があり、歓迎したとは書いてあるが、鎮尚も積極的に動くことはできなかった。アルメイダはしばらく崎津に落ち着いてから、河内浦に移動した。③アルメイダの書簡では、20日間、交渉がなかったことになっているが、ここでは二ヶ月となっている。アルメイダは鎮尚と会うためだけにいろいろと画策をめぐらすことになる。教えを聞くこともしない鎮尚の態度から、アルメイダを招聘したのは、彼ではなく、後述するリアンであることがわかる。④キリスト教徒あるいはそうなることを希望したドン・リアンには、河内浦のキリスト教徒の教会役員指導者となることが決められていたし、すでに洗礼をうける予定の「人々」とその居住場所がおそらくは前もってリアンによって指示されていたのであろう。領主の強い保護がなく、反対派がいるなかで、修道士が一般の人500人の布教を二ヶ月という短期間で成し遂げたことは、すでにリアンがアルメイダの布教以前から準備していたからである。キリスト教徒の数は、アルメイダの書簡とほぼ一致する。

3-(3)「（386頁）この出来事からさほど時を経ぬうちに悪魔は動き出し、前述の状況を見てこれを妨害することにした。というのも、⑤ドン・リアンと称する執政官〔指導者〕が内陸部〔後背地〕の所領をことごとくキリシタンにするために尽力していたからである（o regedor que chamaõ dom Leão trabalhaua por fazer as terras do sertão todas de Christãos: p. 286v）。...以上のことがすべて認められ、協議が整うと、修道士は殿に会いに行き、私は彼に伴ったが、大いに歓迎された。⑥彼らは彼の家で午餐をとった後に、教会に戻った。殿は

さっそく、修道士を訪ね（387頁）て別れを告げるために教会に現れ、我らは騒乱が起きる前に修道士が幾日か滞在していた港（崎津）に向かった。彼は殿の町における改宗作業を終えたので、改宗者にドチリナを教え、連祷を唱える人を教会に残し、修道士自らは港に赴いて、⑦その周囲にある〔西目筋の〕数カ所の集落をキリシタンにするため殿が建てた〔崎津の〕教会に至った。同港は彼の宿泊地から一里〔レグア〕の所にある。これをすべて終えた後の八月十七日、修道士は以上の事柄をコメス・デ・トルレス師に報告するため大村に向けて立った。」

⑤リアンは、河内浦の一町田川の上流部、すなわち彼の土地を中心とした領域の、例えば平野などの布教を強力に推し進めていたことがわかる。ここに至って、大和守や刑部大輔や仏僧などの反対派が、武力闘争を展開していった。この緊張のなかで、リアンは口之津に退去し、修道士たちも一度撤収することになったのである。⑥出立を決めたアルメイダは、鎮尚と午餐を共にしたが、二人は館と教会を行き来していることから、館と教会は近接していたことがわかる。大和守たち反対派が、下田城とその傍の信福寺を拠点としていたと推定されることから、教会は鎮尚の居城河内浦城の傍、おそらく現崇円寺にあったことが推定される[125]。緊張関係のある布教状況では教会が防衛施設から離れて建てられることはない。⑦崎津、今富、大江、高浜、下津深江、など、西目筋は、鎮尚の直轄地で、そこの布教のために、鎮尚は、崎津に教会の建立を援助している。河内浦から西目筋が天草キリスト教の本領であり、「天草くずれ」の舞台となっていったのである。

注

1　何らかの歴史研究の結果でなく、仮設の束からなる、これらからの天草研究のためのたたき台である。数多くの誤解や誤まりがあるであろう。各位のご教授ならびにご指導をお願いする次第である。

2　これまで天草への布教の「始まり」は詳細に語られることはなかった。その歴史を明らかにしない限り、天草くずれに至るキリスト教史も再構築することはできない。「キリシタン」は、世界史的視野からすると、異教ではなく、日本で発生したキリスト教異端と考えている。本稿は、天草くずれに至る、天草キリスト教史序説である。紙幅の関係もあり、概説的な点があることはご容赦いただきたい。詳細に関しては機会を改めて議論する予定である。

3　世界遺産との関連で使用された潜伏キリシタンとは、江戸時代から明治時代初頭にかけての禁教時代に、キリスト教を信仰し続けたカトリックの信徒のことを示し、カトリックに改宗しなかったカクレキリシタンと区別している。これは、正統カトリックからの異端排除の論理である。しかも、この論理に従えば、禁教期にキリスト教信仰を維持した人々こそ「カクレキリシタン」であり、そこからカトリックに改宗した人々が別れたことになる。カクレか潜伏かは信仰の問題に関わるのでこれ以上の議論は停止して、キリシタンあるいは古キリシタンという用語を使用した。（古）キリシタンこそ、世界史における日本土着の異端であり、歴史学の解明すべき課題となるのである。しかし、この点が確認されるのであれば、用語にはこだわらない。

4　1541年から1577年に章潢が編纂した『図書篇』中の「日本国図」、1562年に鄭若曽が編纂した『籌海図編』はいずれも天草は羊角湾の河内浦をさしている。これが外から見た地理感覚であろう。従って、イエズス会が天草という場合は河内浦を意識していた。中山圭「天草における中世の交流―天草の遺跡出土貿易陶磁 から―」『磁器流通と西海地域』周縁の文化交渉学シリーズ4（2011）、pp. 57-86, at pp. 75-78。

5　「天草崩れは単独で起こったのではなく、（隠し念仏などの）異端的宗教活動が問題化する一連の事件の一つ」大橋幸泰『近世潜伏宗教論―キリシタンと隠し念仏』（校倉書房、2017年）、p. 170。「絵踏」はキリシタン以外の異端探索にも使用された器具と化した。

6　『松浦家世伝』（『大曲記』）では志岐氏と栖本氏の戦いになっているが、『八代日記』では志岐氏が合力した上津浦氏と栖本氏の争いになっている。棚底城の争いなどを考慮すると、ここは上津浦氏と栖本氏の戦であろう。『大曲記』、『Amakusaと九州西海岸のNAMBAN』天草市立天草コレジョ翰, p. 9；「志岐文書・八代日記」苓北町史編さん委員会『苓北町史』史料編（昭和60年）、pp. 102-104。

7　本渡市史編さん委員会『本渡市史』（平成3年）、p.

260。

8　ルイス・フロイス（松田毅一・川崎桃太訳）『日本史』全 12 巻（中央公論社、1977-1980 年）；第9巻（1980年）, pp.207-76, 307-308。

9　松田毅一監訳『16・17世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第3巻　1565年～1570年（同朋社、1998年）、pp. 361-367;Cartas que os padres e irmãos da Companhia de Iesus escreuerão dos Reynos de Iapão...Des do Anno de 1549 Até O de 1580, Priemerio tomo（Evora, 1598）, pp. 279r-281v.

10　フロイスによると、リアンは日本人に好まれた洗礼名である。当時の連判状には里安とか理安という名前が散見される。外海枯松神社の最後の宣教師はサン・リアン（St. Leon）である。日本名は不明だがドン・リアンは、直接的あるいは間接的に松平隆信の命を受けて、鉄砲衆をひきいて平戸地域から一町田に来てからは在地の有力者の娘と結婚し、中心地から離れた、例えば、平野、葛河内、市瀬村、津留村などの郊外に拠点を持っていたのではないだろうか。この地区の布教は実質リアンが行った。

11　1571年9月3日付の「カブラルの書簡」で、本渡に到着した一行は、現地の複数の指導者達（regedores）から祝辞を述べられている。この中には河内浦から1569年に撤退したドン・リアンも含まれていたであろう。彼は、当時、本渡城にいて、河内浦の奪還を目指していた天草鎮尚を援助していく。regedorという言葉の原史料での分析が必要である。松田訳の「執政官」という公的組織の役職ではないし、「家老」のような権力者世帯の役務者でもないだろう。

12　史料1と2は、松田毅一監訳『16・17世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第3巻　1565年～1570年（同朋社、1998年）, pp. 371-387;Cartas que os padres e irmãos da Companhia de Iesus escreuerão dos Reynos de Iapao...Des do Anno de 1549 Até O de 1580, Priemerio tomo（ Evora, 1598）, pp. 281v-287v. 一部原典を参考にして修正している。以下同じ。

13　1553年以降平戸はポルトガル交易の中心地として栄え、大量の鉄砲が流入した。しかし、キリシタン信者の増大は、平戸での仏教徒との対立を招いた。1558年（永禄元年）に松平隆信はガスパル・ヴィレラ神父の退去を命じ、教会焼き討ち事件も起こった。平戸はもともと後期倭寇の巣で、ポルトガルとの交易も王直のような地元のボスの力によっていた。平戸地域から派遣された鉄砲衆も、キリシタンで、倭寇に繋がる半自立的な武装海民集団だったのではないだろうか。そうであれば、平戸、生月のキリシタンで、松浦家の重臣、籠手田安昌・安経の配下ということも考えられる。鉄砲衆は、平戸の情勢を考えて天草へ移動したのではないだろうか。

後述するが、大江組大庄屋の松浦家の伝承によると、松浦は、この鉄砲衆の頭で、最初、濱田一統とともに、軍ヶ浦に落ち着き、そこから一町田へ移動したという。濱田は、軍ヶ浦に定住し、造船所をいまでも営んでいる。残念なことに濱田家には記録も記憶も残ってはいないが、松浦四郎氏によると濱田家とは固い絆を維持し続けたという。但し、これらは推測の域を出ない。更なる検討が必要である。軍ヶ浦も倭寇の巣（交易地）として知られ、1562年に編纂された明の『籌海図編』には羊角湾に「阿麻国撒」湊の傍に「一国撒介烏刺」（軍ヶ浦）という地名が見られる。中山圭「天草における中世の交流―天草の遺跡出土貿易陶磁 から―」『磁器流通と西海地域』周縁の文化交渉学シリーズ4（2011）、pp. 57-86, at p. 77。

14　「この領主（志岐麟泉）はポルトガル人の船が己の港に来る利益のために偽ってキリシタンになったが…異教徒に立ち戻り、そのうえ聞くところによれば、公然と悪魔と崇めてこれを話し、デウスのことをひどく憎悪しているという。」松田毅一監訳『16・17世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第4巻1570年～1577年（同朋社、1998年）p. 80。

15　宗門内では真宗であるがここは宗門外部からの名称一向宗を使用する。

16　文化年間の事であるが、崎津には一町田村の安養寺（東本願寺派）の一向宗門徒136人、今富村には富岡町の圓光寺（西本願寺派）の一向宗門徒14人が記録されている。大江村には一向宗門徒はいない。『天草吟味扣』、pp. 32-33。

17　松田毅一監訳『16・17世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第４巻1570年～1577年（同朋社、1998年）pp. 79-81; Cartas que os padres e irmãos da Companhia de Iesus escreuerão dos Reynos de Iapao, pp. 309v-310r.

18　松田毅一 監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』（同朋舎出版、1987-1998 年）、第III期第5巻、82頁。1623年の禁教期ではあるが、聖職者は、イエズス会士28人、司祭23人、修士5人、フランシスコ会士78人、フランシスコ会日本人聖職者1人、ドミニコ会士2名、アウグスティヌス会士1名の138人程度であった。レオン・パジェス『日本切支丹宗門史』中（岩波文庫、1940;1983年）、p. 280。

19　今村義孝『天草学林とその時代』（天草文化出版社、1990 年）、p. 31。

20　吉村豊雄『潜伏キリシタン村落の事件簿』（清文

堂, 2017）, p. 17。

21 「ヴァリニャーノは、1581（天正9）年11月の半ばごろ河内浦に赴いた。この時、ヴァリニャーノは「ここ河内浦にも我らは非常によい場所を所有している」…フロイスは〔天草合戦で本渡城主種元が戦死した後〕加津佐のコレジヨが河内浦に移されるに際し、そこではドン・ジョアン（天草久種）が（先に）提供してくれた数軒の家屋と、我ら（イエズス会士）が以前（から）所有していた家屋をもって、60人近い（会士）と、30人以上の同宿、および60人近い下僕を収容するに足りるコレジオが設立された」としている（玉木譲『天草キリシタン遍路』（熊日出版、2018年）、pp. 173-74（筆者が多少修正を行った）。ヴァリニャーノが作成した1582年2月の「日本のカザと毎年の必要経費の目録」によれば、天草河内浦には、コレジオのごときカザ（otra Casa manera de colegio）が存在した。これは教育施設というよりは、イエズス会士の共住（collegium）の場であろう。このイエズス会が所有している場所は、1571年にキリシタンとなった一向宗の指導的僧侶が寄進した庵、現安養寺の前身ではないかと推測している。改宗した以上僧が所有していた庵はイエズス会に寄進されたであろう。これがイエズス会が所有していた河内浦の「コレジオのごときカザ」であり、そこに1591年に5月に天草久種が寄進した隣接地を合わせて、天草河内浦コレジオが加津佐から移転してきた。同時に修練院が併設された。そこには、①教室、個室、共同部屋からなるカザ、②食糧貯蔵、調理、食堂からなる施設、③印刷所があった。「1592年11月イエズス会名簿」には天草のコレジオおよび修練院には、司祭7名（そのうち教師3名）、イルマンと記された50名の修学生と実務助修士がいた。構成員の数は時期で変化した。コレジオは1597年9月に長崎に移転する。高瀬弘一郎『キリシタン時代のコレジオ』（八木書店、2017年）、pp. 3-9, pp. 221-225、353；同『キリシタン時代の文化と諸相』（八木書店、2001年）、pp. 15, 51, 122。天草河内浦コレジオという表現は高瀬から借用した。コレジオを一町田中村の安養寺に同定したのは、一向宗寺院とイエズス会の所有地だけではなく、地勢的に、一町田川の右岸の広い高台（「安養寺由緒書」によると勝地とある）にあり、毎日の礼拝の典礼実務を補佐し学ぶために教会に近いこと、あるいは外洋に出るための交通と通信の要衝であった崎津に、河内浦（天草）津である同地から小舟で移動ができたこと、そしてなによりも河内浦城と下田城を結ぶ線上にあり安全と平和が保証されたことによる。

22 Luis Pineyro, Relacion del Sucesso Que Tuvo Nuestra Santa Fe en los Reynos del Japon: Desde el año de Seyscientos y Doze Hasta el de Seyscientos y Quinze, Imperando Cubosama, Madrid : Por la Viuda de Alonso Martin de Balboa, 1617 p. 514.

23 天草をMakusaと表記する例は、後述付録3のポルトガル人の手紙にもみることができる。

24 1567年頃にリスボンで生まれ、30年以上の日本滞在の間、二度のイエズス会管区長を務め、晩期には司教代理であった。1630年には大江、崎津に潜伏した。1633年に伏見近郊で落命した。彼は最後までコレジオの再建と聖職者養成を配慮していた。レオン・パジェス『日本切支丹宗門史』下（岩波文庫、1940;1983年）、p. 159。

25 鶴田倉蔵『天草鶏肋史』(2012), p. 99-100。

26 「安養寺由緒書」では、創建の時期は、最初元和元年と書かれそれが三年に修正されている。建設決定の時期と実際の建立の時期との差であろうか。前述したように、それ以前に一向宗の寺が存在していたが、詳しいことはわからない。

27 林銑吉編『島原半島史』中巻（長崎県南高来郡市教育会、1954年）、pp. 529-30。

28 玉木譲『天草キリシタン遍路』, pp. 91, 94-95。

29 高埜利彦『近世の朝廷と宗教』（吉川弘文館、2014年）。

30 堀田善久『改訂版　天草の歴史』（天草市教育委員会、平成20年）、pp. 132-34。

31 本渡市立歴史民俗資料館編『鈴木重成とその周辺』（平成15年）、pp. 75-85。

32 浄土真宗の檀家に関しては、安養寺住職東良昭氏による。

33 鶴島博和編『肥後国天草郡一町田組・大江組大庄屋松浦家資料集（1）』（刀水書房、2021年）、pp. 99-190。

34 「（1629年）アントニオ・ジャノネ神父は…大江で人の世話をしていた。河内浦にいた領国の代官は、神父の宿主を監禁した。…神父は、淋しい所に退去せねばならなかった」（レオン・パジェス『日本切支丹宗門史』下（岩波文庫、1940;1983年）、pp. 132-3。ナポリ王国のビトントの人で、1609年に来日し、ほとんどを有馬での司牧に努め、1633年島原で殉教している。一つの弱い仮説ではあるが、大江の教会を再建し、上組そして下組を整備したのはジャノネではないかと考えている。1805年のとき大江上組の信徒の洗礼名のほとんどが、ヨハネのジュワン（イタリア語ではジャノネGianone）表記であったことが根拠である。1617年（元和3年）の『コーロス徴収文書』で大江組の12名の洗礼名

にジョワンはなく、ハビエル、トーマス、ミゲル、パウロ、アントン、エステワン、マチスなどバラエティに富んでいた。ジャノネ神父が大江村に潜伏し司牧を行なってから、人々は彼の名を洗礼名として受け継いだのではないだろうか。下組は多少変化があるやはりジュワンが多い。大江に潜伏した聖職者は、ジャノネ（1622年～25年、28年から29年）とマティウス・コーロス（1629年）の二名が確認されている。ジャノネ神父の滞在は、禁教弾圧期にしては長期間にわたっていて、影響が大きかったであろう。その記憶が古寺様として残ったのではないだろうか。詳細は、松本博幸「近世初期天草とキリスト教の状況」『天草―祈りの原点とキリシタン文化―』、pp. 42-44 at p. 43, 表1の「近世天草における宣教師の動向」参照。

35　1805年（文化2年）の天草くずれでは、「古寺のことだが、昔寺があったとかで、その和尚が本人かどうか確かめられたと、言い伝えられているそうです。またどの宗派に属するのか言わなかったそうです。今は、尊い地蔵様が立っていてたびたび参拝する者もいるそうです」しまばら古文書を読む会編『天草吟味扣』（平成13年）、p. 195。以下『天草吟味扣』とする。昔がどの時点かは、わからないが、和尚はジャノネ神父のことであろうか。

36　「無双山塚〔地元ではブソウ山〕についてだが、善人もそれとも言い伝えられています。または前の大庄屋の元祖赤崎六良兵衛という人の塚かとも申しつ伝えられています。」『天草吟味扣』、p. 195。赤崎家がキリシタンの家系であり、後述する赤崎六良兵衛が先の大庄屋赤崎家の元祖とされているが、解任された赤崎伝左衛門の直系、祖父か父ではないだろうか。尚、「六郎兵衛」は「六良兵衛」表記であろう。無双山、地元では武双山（ブソウ）山、は大江川左岸の北から里と桑鶴の間の山である。後述するシビレ様の拝塔の南の峰伝いで、半分は、下組の水方の家系、山下家の持山だった（松浦四郎氏）。大江の伝承では、富岡代官所が探索をしたらたくさんの塚が見つかり、刀剣甲冑類が多く出土したという。そして開墾の時代には、おびただしい数の人骨が出て来たという。『天草吟味扣』の記載は正しく、大きなキリシタン墓地があった。『天草町郷土史』、p.82。

37　「弓取之墓所無之哉之儀相糺候處　弓取者勿論　善人之墓所　其外怪敷墓所一向無御座段申出」『上田宣珍日記』文化二年九月十六日。

38　鶴島博和「天草大江のカクレキリシタンの「歴史的景観」―キリシタン塚と島原・天草一揆からの落人伝承―」『潮騒』（天草文化協会）36（2021年）。

39　「文化2年3月21日に大江村を訪問した大矢野大庄屋吉田長平は、（大江村には）頭百姓が49人がいて、他はこの頭百姓の名子である」と島原藩に報告している。（大江村杯ハ一統ニ御座候処頭立候百姓四十九人有之其ハ右之者名子ニテ御座候）『天草吟味方扣』pp. 159-60。

40　鶴島博和編『肥後国天草郡一町田組・大江組松浦家資料集（1）』（刀水書房、2021）p.43。大江村の口伝では、村は50の百姓名（株）を持つ、49家族の村方と小前百姓からなる共同体が支配していた。そして、大庄屋もその構成員であったという。まさに頭百姓寡頭制支配である。これは、史料的には1747年（延享4年）から1805年（文化2年）までその存在が確認できる村の基層的構造である。名を保持する本百姓と名子が、塚を中心として小組を形成していた。それが、大江村のキリシタン信仰の細胞であった。その構造については別の機会に議論する。尚、この構造に最初に着目したのは、児島康子に従うと、倉田和四生「かくれキリシタンの組織と村落構造―熊本県天草郡西部の事例―」『関西学院社会学』第4輯（1958年）, pp. 48-65である。

41　山下大恵氏と西田茂正氏による記憶と1826年（文政9年）の「大江百姓名一覧」というメモ書きの日付からすると、原紙が存在したであろうが確認できない。尚、家名については多くは掲載の許可を得ているが、離散も激しく全体というわけではないで、ここでは省略した。掲載許可を直接得た家で、必要なときにのみ名前を記載する。

42　生月ではジビリア様が祀られ、お盆に相当するが、外海、五島における「バスティヤン暦」には存在しない生月独自の崇敬行為である。その起源は、8月15日は聖母マリアが昇天した大祝日でその前日に行う潔斉の苦行ヴィジリアエ（vigiliae）か、1556年8月15日の前の日曜日にローマ教皇から与えられた大赦（ジュビレオ：Jubileo）のいずれかであろう。しかし、詳細は継続的な検証を必要とする。宮崎賢太郎『カクレキリシタンの信仰世界』（東京大学出版会、1988年）、p.127；片岡弥吉『かくれキリシタン：歴史と民俗』（日本放送出版会、1997年）、p.136；田北耕也『昭和時代の潜伏キリシタン』（日本学術振興会、1954年）、pp.296-97。

43　家の伝承によると、松浦の由来は、平戸の籠手田一族で、濱田一党と来島したという。濱田は、代々軍ヶ浦で造船を営み、松浦とは親族的な関係を築いてきたという。濱田は、鉄砲隊を乗せた船の船頭であろうか。松浦の初期系図を組み上げた鶴田文史によると、松浦の初代は松浦四郎九郎、二代、松浦四郎兵衛安高で両名には戒名はない。

初代と二代に関しては史料がなく、家の記憶に頼るしかない。三代は松浦四郎兵衛半左エ門で、1641年（寛永18年）に亡くなり、戒名は生譽淨念大姉。四代は松浦四郎兵衛半之丞（天運浬安信士）で没年は不明である。五代は、四郎兵衛次太夫、戒名、松雲院乗譽宗山英風信士で、1705年（宝永2年）に亡くなったが、元禄年間に所在に因んで平野に改姓した。ドン・リアンは初代、松浦四郎九郎か、四代が初代の可能性もある。あるいは、平野への改姓の際の、家の記憶を戒名に刻んだものかもしれない。初代から四代までの系図は検討が必要であろう。

44　寺沢時代の松浦家は、キリスト教徒であると同時に浄土真宗安養寺の檀家であった可能性がある。松浦本家が平野として大江に移った後にも、一町田白木河内に残った松浦家の分家の松浦儀市は、文政年間に焼失した安養寺の再建に10人の檀家の代表として尽力している。「安養寺由緒記」。

45　柿森和年「五島の奈留島に伝わる「絹のオラショ『今日の御じき』について」『キリシタン文化』152 (2018年), pp. 33-48. 史料は柿森論文に依拠している。「御じき：御じひ（misericordia）」のオラショは、この祈祷文は奈留島だけではなく、五島福江島の玉之浦の水方も所持していた。題名は「御じひ」となっている。書面のみならず、伝播の形態など比較検証が必要である。

46　玉之浦の祈祷文。

47　「あさき六（九）郎兵衛様。つれやいの女房すひいな様。」（玉文浦の祈祷文）。

48　現在史料的根拠を探している最中である。現在の大江天主堂は、道田伝作、赤崎松彦、森口茂吉三氏の敷地に、1933年（昭和8年）に建設された。道田家は、1876年（明治9年）転宗願いを出し、赤崎家は、旧大庄屋赤崎伝左衛門の子孫、森口家は、松山家から別れた。いずれも大江村の有力キリシタンの家系である。森口茂吉氏は、ガルニエ神父の賄いを担当したその人である。竹森敏、竹森要『天草からフランスに架ける橋：愛の手紙のコレクション』（1990年）、p.255；五人づれ『五足の靴』（岩波書店、2007年）。

49　明治16年の『熊本県水産史』によると、崎津と大江の漁場は、南は魚貫崎から北は下津深江まで、東は河浦、つまり羊湾の奥から西は大洋12・13里まで海面を区画することなく広がっていた。羊角湾から西に12・13里、すなわち50キロメートル程海面を区切らずに行くと、唯一の目印は南西の甑島である。そしてそこは大江鮪漁の漁場であった。下津深江―魚貫崎―甑島を結ぶ線の内側が凡その漁場であった。49人の頭百姓の一人で横浜の沢村家は、甑島漁で網元となり、その子孫の一人は大江で松浦家の番頭となり村長となった田中七二氏だという（西田茂正氏）。鶴島博和編『肥後国天草郡一町田組・大江組大庄屋松浦家資料集（1）』（刀水書房、2021年）、史料32と31, pp. 34-36；橋村修『漁業利用の社会史―近世南九州における水産資源の捕採とテリトリー―』（人文書院、2009年）参照。

50　実際の吟味の基本的史料は、まず、「大江村百姓宗門心得違之者吟味日記（以下大江村吟味日記）」（上田家文書）、「今富村百姓宗門心得違糺方日記」（上田家文書）、「文化二年丑六月、宗門心得違之者調方日記、高浜村」、「文化二年丑七月十八日ゟ富岡呼出、宗門心得違之者共御吟味日記、高浜村得違糺方日記」（上田家文書）がある。「大江村吟味日記」は富岡での個別吟味が中心である。崎津村に関しては、「異法御呼出御糺方日記」があるという。筆者未見で、現在所在を確認していない。これらに関しては、依然として古野清人『隠れキリシタン』（至文堂、昭和41年）が導きの糸となる。他に、島原の佐久間家に残っていた『天草吟味方扣』（島原城キリシタン資料館）が重要な史料である。ここでは、しまばら古文書を読む会編『天草吟味扣読本』（平成13年）を使用した。これら以外は各註にて表記している。

51　天草古文書会『天草古記録集11・12合併号天草郡村々明細帳（中）』（1990年）；天草古文書会『天草古記録集13・14・15・16合併号　天草郡村々明細帳（下）』（1993年）。鶴島博和編『肥後国天草郡一町田組・大江組大庄屋松浦家資料集（1）』（刀水書房、2021年）第二部の大江組の「転切支丹並類族死失帳」参照。

52　翻刻は、松田唯雄『天草富岡懐古録』（歴史図書社、1978年）pp. 122-23。

53　鈴木改革の最初の寺として富岡の城山に創建された寿学院は、ある時期キリシタン探索方の何らかの役割を担ったのだろうか。検討を要する。

54　「牛深の漁業史」（教養セミナー、平成21年）。

55　「壱ヶ年限元極一札之事茂串浦
一　鮪網代壱ヶ所
此運上当卯十月より来る辰正月限り金拾五両二相定、尤四ヶ所割受之事
右者今般鮪網代私共引請　漁業志度御願申上候處
御聞済被成下　千万忝仕合奉存候然ル上者村方
御運上銀　当十二月十五日限リ　半方金
七両弐歩相納　来辰正月十五日限　大漁不漁二不拘
皆納可仕候　為念村御役印願受
一同連印一札差出置候處　仍而件如

慶應三年　茂串郷
卯十月　鮪網代下受
漁松　以下　平四郎　愛蔵　仁助　又五郎　喜代蔵　喜市　恵次郎　恵重　種助
牛深村年寄立会　御衆中百姓代
前書之通相違無之候二付　奥書致印形候　以上
同郷　年寄　　猪一郎」「岡郷永代万覚帳（畑中家）」
漁労と信仰の関係は現時点では仮説にすぎない。検証を続けていく。

56　前欠。裏張りをした際に、ナイフなどで切った跡がある。前半部分は不明。

57　「文化二年丑大江村白札付書上帳」（松浦家文書）。

58　当時の村の人々が、「心得違い」をどのような言葉で理解していたのかも課題である。1770年代であれば邪宗か。

59　『大江村吟味日記』から構築した鶴島のデータベースでは[231]弥平：下組：洗礼名ペトロである。5月16日に呼び出しを受けている。データベースは、「天草くずれ」に関する全村落を網羅したものを、公開したいと考えている。ここでは整理番号を［　　］内で表記する。

60　「文化二年丑八月大江村白札付書上帳」（松浦家文書）

61　以下の叙述は、児島康子の協力失くしては不可能であった。ここに記して謝意を表したい。

62　藩は、1799年（寛政11年）3月に「切支丹宗門二付申渡」を、そして1802年（享和2年）8月に「邪宗門取締令」を島内に下達している。この間の事情は、大橋幸泰や児島康子「天草異宗一件における心得違之者―潜伏キリシタンの信仰を通して―」『人間文化研究』（長崎純心女子大学）18、(2020年）が詳しい。「天草くずれ」が発生した頃には、「切支丹」という言葉は使用されなくなっていった。17世紀からキリスト教探索の史料であった天草大江組の『転切支丹並類族死失帳』は18世紀末までには消滅した。「切支丹」に対して権力側は「異宗」、「邪宗」という言葉を使用し始める。島原藩は、1805年（文化2年）の探索において「心得違」という柔らかい言葉を使用し始めた。これは児島康子の指摘である。

63　祭事のための牛殺しは、クリスマスを重視する生月系のキリシタンの伝統を引き継いでいた。長崎外海では、牛ではなく山羊を用いた（枯松神社保存会会長松川隆治氏)。「牛肉を遣わすというのはどういう訳であるかとお尋ねが有りましたので、三太丸屋が産をなさいますとき牛小屋に行かれましたところ、牛がことのほかあばれ回りましたので、付近の牛小屋に行かれましたところ、前膝をおって礼儀をつくしましたので安産をなされました。それで牛はころすと仰せになったので、牛を供えるのだと申し伝えを承っていますと申しあげました。」（『大江村吟味日記』)。牛小屋という話は、聖書では明確ではない。「ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。」（ルカ書2:6～7)。牛小屋の話は、「偽マタイ福音書」の「イエスは洞窟で生まれ、その後、マリア達は洞窟をあとにして、家畜小屋に入って、イエスを飼葉桶に寝かせると、牡牛とロバがイエスをあがめた」によるのであろう。牛と山羊（ロバ？)、天草と長崎外海との違いは検証の必要がある。

63a　1772年（明和9年）の記録であるが、栖本組の石高は3,827石（小数点四捨五入)、人高12,389人、一町田組は、それぞれ1,992石、7,438人、大江組は、それぞれ1,595石、12,866人である。これに対する牛馬の頭数は、栖本組が牛160頭と馬770頭、一町田組が牛18頭と馬411頭、大江組が牛4頭と馬411頭である。これと比較して1838年（天保9年）では、農業生産性の増加を受けてか、栖本組は牛379頭と馬1235頭、そして一丁町組が牛273頭と馬824頭なのに対して、大江組は牛0頭と馬1720頭となっている。石高と人高で生産力を推定すると、栖本組の0.3$\left(\frac{人高}{人高}\right)$、一町田組の0.28に対して、大江組は0.12しかない。大江組の農業生産性のきわだった低さが推定される。それでも牛馬の頭数のアンバランスは異常である。もと々牛の頭数が、極端に少なく、1838年に0となったのは、牛が食材と認識されていて、天草くずれの影響で天保9年には飼育されなくなったためと推測される。松下志郎「幕府領肥後天草郡の革集荷と肉食――キリシタン的風土と関連して――」『九州被差別部落史研究』（明石書房、1985年)、p.126、表2より。

64　上田宣珍はまめに島原藩士に付け届けをしている。『上田宣珍日記』や書簡などから関係性を再構築することができるだろう。

65　一族の大崎辰三は今富村の水方で、その甥は、1899年から1928年まで、上五島の青砂ヶ浦小教会主任司祭を務め、頭ヶ島天主堂を計画し鉄川与助によって竣工した、大崎八重である。

66　その後の状況を考えると、村方一統は成立していなかったであろう。前述した延享4年の大江組大庄屋は、大江組の庄屋衆と大江村の村方の一統で選出され、代官所がこれを認めるという手続きを経ているし、明治元年の宮地岳村の庄屋選出は、有力百姓による投票用紙による記名投票が行われ

たが、中西笠之助が圧倒的な多数を得たにもかかわらず、複数の対立候補もいて満票ではなかったので、この時は任命されなかった。投票用紙が天草市立天草アーカイブズに残っている。包紙には「宮地岳村庄屋入札辰十二月十七日夜年寄百姓付中頂ヶ置」（10-2-2）とある。宮地岳村の庄屋選出は別稿を予定している。宜珍の庄屋兼職はあきらかに島原藩の指令によるものである。

67 「巳来隣村申合諸事御互取斗度　且吉五郎殿跡之義　御気を付候様申達候　尤宇治之助殿他出二而御母公並年寄中へ申置候」『宜珍日記享和元年』

68 「大庄屋代相勤候　夫ゟ大庄屋宅並中山江立寄…西国人往来切手三通　冨岡町高嶋宅二而大江大庄や相渡シ　御役所江御返上被下候様申置候：『宜珍日記享和元年』

69 準提観音は、天草では東光寺の地元の本町を中心に文化・文政年間にみられた地域性の強い時代限定的な信仰である。しかも、文献史料は東向寺にはなく、上田家のもののみである。平田正範『天草かくれキリシタン　宗門心得違い始末』（サンタマリア館、平成13年）、44頁。

70 『文化二年丑六月　宗門心得違之者於村方取調方日記　高浜村』上田家文書。1801年（寛政3年）11月8日からの授戒会には高浜村から132人が参加したが、今富村では16人に留まっている。参加は家毎と考えると、高浜は1772年（安永元年）の290戸を採用すると、46％の参加となる。距離を考えると相当な数である。一方、今富の戸数を明治15年の274戸から換算すると、6％程度が参加したことになる。今富における上田親派の規模はこの程度であろう。

71 東昇「近世後期肥後国天草郡における庄屋をめぐる書籍の貸借と学問・行政」『京都府立大学学術報告（人文）』67（2015年）, pp. 117-132；宜珍から大竹への付け届けや書簡は、例えば「大竹様江御返書　陶器共に一箱に入る」『上田宣珍日記』文化二年十一月十五日。

72 『上田友三郎日記』（「上田家文書」）には冒頭部分が損傷しているためか表題がない。『上田友三郎日記』も先例に倣ったまでである。児島康子によると、原本には、後から「宗門心得違御吟味日記」とペン字で挿入されているという。氏は、日記は享和3年10月23日から書き始められたと推定している。児島康子「天草異宗一件における心得違之者：潜伏キリシタンの信仰を通して」、『人間文化研究』18（2020年）、p. 3 n.10。児島が指摘しているように、『日記』ではキリシタン信仰の指導者を「邪頭之者」と表記している（p. 3）。「心違」という言葉は、吟味の過程で地元にも浸透していったのであろう。

73 『上田友三郎日記』；現代語訳は、吉村豊雄『潜伏キリシタン村落の事件簿』（清文堂、2017年）, p. 47.

74 降誕祭（霜月）、復活祭（二月）と一週間の日繰り、ハレの日には金物は使用しない、などを調べ上げている。「霜月者二月之祝日ゟ七日目々々と繰候而、毎月少々之祝位者在之候由、右當日ニ者、金物ヲ忌候由ニも申候」（『上田友三郎日記』）。

75 最初調べ上げた時は漢字で記録し、後に素人と分けるためにカタカナ表記している。大江では、「ヲウエノ内、ナカヲ（長尾）　タキチ（太吉）、ノナカ（野中）　イチザウ（市蔵）、　ヲウカワチ（尾ノ河内）　カスケ（嘉助）、エツサキ（越埼）　キチヒヤウエ（吉兵衛）、クワツル（桑鶴）　イハチ（伊八）、ハマサト（濱里）　マツエモン（松右衛門）、ハマサト（濱里）　イサエモン（伊佐右衛門）、ニシ（西）　トウサク（徳蔵）、サト（里）　ツ子ヒヤウエ（恒兵衛）、サト（里）　サクノジヤウ（作之丞）」さすがに格付けは今富だけで、例えば西河内の迫では、「イマトミノウチ…ニシカワチ　一　タロウサエモン…二　テンジヒャウエ…三　ゼンスケ…四　マンヒャウエ」等。『上田友三郎日記』

76 一町田村の徳兵衛にも牛殺しの疑いがかかり、養生のためという結論に達している。組外のため、探索はしていないであろう。『上田友三郎日記』

77 児島康子「天草異宗事件における露見の構造：『上田宜珍日記』、「上田友三郎日記」にみる一考察」『熊本大学社会文化研究』3, pp. 235-52。

78 児島康子「天草異宗一件における心得違之者」、p. 5。

79 レザーノフ（大嶋幹雄訳）『日本滞在記―1804～1805』岩波文庫（2000）；藤田覚「鎖国祖法観の成立過程」（所収：渡辺直彦 編『近世日本の民衆文化と政治』（河出書房新社、1992年）；永積洋子編『「鎖国」を見直す』（山川出版社、1999年）；荒野泰典『「鎖国」を見直す』（岩波現代文庫、2019）. 藤田覚は「鎖国」が江戸幕府の祖法として確立されたのは実はレザーノフ来航をきっかけとしていると説く。

80 『天草吟味扣』、pp. 134-35, 139；児島康子「天草異宗一件における心得違之者」、p. 5。

81 『天草吟味扣』、pp. 114-15では、吟味からはずれる村役人を、大江組大庄屋松浦四郎八、今富村庄屋上田友三郎、崎津村吉田宇治之介の三名としている。関係する村落が吟味対象ということだが、これは奇妙な話である。彼らがキリシタンでなければ外す理由はない。吉田については、唐船曳援賃銀を隠匿したことで村の漁師との対立があったことを理由に挙

げている。一方、松浦四郎八はキリシタンとして認識していたようである。川鍋は3月16日の書状で、大江村の儀平という酒屋を心得違いの者としているが、この儀平は大庄屋の親類であると記している（「儀平と申者酒売出…右儀平ハ大庄屋親類之者ニテ内々左之趣相届」）。『天草吟味扣』、p. 150。儀平は『大江組転切支丹並類族死失帳』で今富の三助系のさんとその婿大江村酒屋源右衛門の子で大江麹屋儀右衛門の息子であろう。儀平の親族は、甑島で鮪漁を営み、息子の一人は大江で田中家の養子に入り松浦家の地所内で暮らした。鶴島博和編『肥後国天草郡一町田組・大江組大庄屋松浦家資料集（1）』の表4の58番参照。『大江吟味日記』では［下組no. 240］か。

82 『天草吟味扣』、pp. 144-45。なぜ、一町田組や久玉組の探索が無視されたのかは、史料的には確認できていない。それでもいくつかの理由はあげることができる。ひとつは、最初の探索を行った、上田親子と大竹の狙いが大江組の大江、崎津、今富に絞られていたことにある。その訳は後述する。そのため幕府への伺い書に書く必要がなかったのである。第二に、幕府に提出した伺い書に大きな漏れがあるという失態をさらすことは、藩の沽券にかかわると判断したのであろう。事は、幕府の命令ではなく、島原藩の伺いで始まったからである。第三に、レザーノフの問題が起こり、藩としても幕府から予想される海防命令に答える必要があり、「天草くずれ」は緊急の課題ではなくなっていたからである。

83 「頭百姓である49人がいて、他はこの頭百姓の名子である」『天草吟味扣』、pp. 159-60。

84 強権的に庄屋となった上田友三郎でさえ、迫毎の決定を重視した。吉村豊雄『潜伏キリシタン村落の事件簿』、p. 76。

85 庄屋の統制は不十分で、周平などが自立的に活動している。『天草吟味扣』、p. 165。周平は崎津の中心的水方か。

86 高浜村の追加調査の際の上田宣珍の行動は、在地領主のそれである。

87 この報告書の写しは、「隠密方書面写」とある。『天草吟味扣』、pp. 188-90。隠密山川龍助は、3月27日川鍋次郎左衛門に「発言難相成相聞申候只今ニテハ上之恐ヨリハ申合置候もの、打殺候を恐白状不致」という報告をしている。島原藩は山川龍助を大江に派遣した隠密とよんでいた。吟味当初の大江村のかわらぬ静けさは、川鍋次郎左衛門の3月16日の書面にある。「平日ニ不替静有之候ハ隠密山川勝（ママ）助ヨリも申越候」：『天草吟味扣』、p. 152。勝は龍の読み間違え）。大江での彼の住居手配、食事、金の工面、情報伝達を担ったのが上田宣珍であったことは、鶴島博和「天草くずれの大江横目付山川龍助について」『潮騒』37（2022）掲載予定、を参照。

88 宗教世界を、時間のような身体性を抽象的に表現する価値を共有する共同体という定義が前提にある。

89 九州と島嶼の古キリシタンは使用する暦によって、外海・五島・長崎のグループと、生月・平戸の二つにわかれる、としよう。前者は、バスティアンの暦と言われる日繰りを用いた。「バスティアンの日繰り」とは、1634年（寛永11年）に太陽暦を太陰暦に換算する方法や復活祭の日付計算を学んだ長崎の深堀平山郷の治兵衛という名の宣教師が残した最後の暦を、外海・五島・長崎のグループの古キリシタンが書き写して用いてきたものと言われる。このグループは、帳方―水方―触役の三役の指導下に信仰を守ってきた。浦上一番崩れの際に没収された資料の中に、幾助なる者によって1787年（天明7年）コピーされた「寛永11年の暦」がある。天明七年（1787年）の復活祭は4月8日だが、「バスティアン様の日繰り」の日付をそのまま写している。暦の運用そのものには地域差があり、外海では春分の日を四旬節の中間点で、春分から二十日後の最初の日曜日を復活祭とした。五島では復活祭を教会暦の起点として、その他の祝祭を日数で計算していた。

生月・平戸では、降誕祭を冬至前の日曜日として暦計算の起点とした。四旬節の始まりの「灰の水曜日」は「悲しみの入り」とした。生月の信徒組織は、全島が北の上組と南の下組に別れ、それぞれ爺役―ご番役―み弟子からなっていた。祝日の決定は土用中寄（どようなかより）といわれる各地の信徒の指導者の集会で協議、決定され、「帳方」などは存在しなかった。それゆえに、復活祭を起点にして祭りを配置する日繰りは存在せず、土用中寄ではクリスマスに相当する「霜月のお誕生日」、おそらく八月十五日の聖母被昇天の徹夜ヴィジリアエから音韻転訛した旧暦七月のジビリヤ様、バスティアン暦では「もろもろのどぼらいにち」とされた11月1日の諸聖人の祭りである旧暦9月の「オトボライ」の三つだけが決められ、復活祭に関しては何の言及もない。片岡弥吉「かくれキリシタン」片岡弥吉・圭室文雄・小栗純子『近世の地下信仰―かくれキリシタン・かくれ題目・かくれ念仏』（評論社、1974年）、pp. 17, 25, 92, 104；五野井隆史「イエズス会士によるキリスト教の宣教と慈悲の組」『日本学士院紀要』72（特別号）, pp. 261-272; Peter Nosco, ‘Secrecy and the transmission of tradition-Issues in the

study of the 'Underground' Christians', *Japanese Journal of Religious Studies*, (1993), pp. 3-29, at p. 11; 田北耕也『昭和時代の潜伏キリシタン』(日本学術振興会, 1953), pp. 283-97. 生月の南と北の区分は、南の籠手田安経の1558年の、北の一部勘解田の1564年の「領民一斉改宗」と関係があるだろう。

90 『大江組吟味日記』五月八日；『上田友三郎日記』；『天草吟味扣』、p. 193。

91 『天草吟味扣』、p. 193。

92 「(高浜村) 異名トメンス (トーマス) 弥平。祖母ハ大江村越崎伝兵衛叔母也祖母より母ニ伝母より私ニ伝申候…祭日之事ハ母存生之内ハ大江村越崎三右衛門方より前以為知来仕来候得とも年ニ依リ遅ク為知来用意等も不行届儀有之候故八九年前より霜月十五日ニ相究メ仕申候…十文字之儀ハ叔父甚左衛門仕候得とも十二年以前同人頓死仕候ニ相伝不申候故右之伝相失申候」(『文化二年丑六月　高浜村宗門心得違之者於村方調方日記　高浜村』)。越埼は上組に属している。文化二年には三右衛門は見当たらない (おそらく死亡)、その代わりに越埼の吉兵衛なるものが、上組の尾之河内の嘉助や長尾の太吉、下組の桑鶴の伊八 (前述した水方山下家) 等10人のキリシタン指導者の一人として現れている。吉兵衛は三右衛門の子か。越埼の松山家の可能性がある。現在の大江の天主堂の土地は、松山と赤崎ものであったといわれている。松山家は赤崎家と姻戚関係にあり、延享4年に大庄屋職が、赤崎から松浦に代わった際に、両家の多くが離散し、松山家の一部が、外海、五島へと移住した可能性を考えている。「今日の御じき」を伝えた松山の親族であろうか。もしそうだとすると、大庄屋交代の理由は、赤崎の名前がコーロス徴集文書にあり、単なる年貢の使い込み以外の切支丹類族という問題があったのかもしれない。

93 『大江組吟味日記』五月八日。

94 明治2年に島原で捕縛された山伏の行李から聖書が見つかっている。鶴島博和「天草における地域と帰属意識」森山恒雄編『地域と構造―天草を素材として』(1989年)、pp. 1-52。

95 この世とあ世の橋渡しである葬儀については、昭和の今富村の分が記録されている迫田光雄「隠れキリシタンの葬送儀礼」『ふるさとの文化　河浦町冨津の文化と伝承』第1集 (平成1年), pp. 32-35を参照。

96 董振江「天草の人口問題」『天草諸島の文化交渉研究』(2011), pp. 183-190. 人口増大の原因としては、堕胎や間引きを嫌う慣習や食料物資の円滑な流通が挙げられるが、証明ができておらず検討を要する。荒武賢一朗「天草諸島の人口増大と産業の形成」荒武賢一朗編『近世日本の貧困と医療』(古今書店、2019年)、pp. 37-53。

97 海域九州の家族構造は、結合大家族、あるいは一族や名子を含む、「屋敷地共住集団」(同じ屋敷地内に分離、独立の建造物を作って共住生活を営む) であり、基本的に双系制家族構成であり、嫡女が重要な意味をもっていた。嫡女に関しては、大江組の『転切支丹並類族死失帳』参照。清水元『アジア海人の思想と行動』(NTT出版, 1997), pp. 31-33。

98 詳細は別の機会に譲るとして、ここは上田宣珍の家を例としたい。1800年 (寛政12年) の「宗旨御改絵踏帳」では上田宣珍の世帯は、男性38名、女性31名の計69人が記録され、そこには叔父の家族や従兄弟の妻から11人の名子とその家族、奉公人が記録されている。その僅か6年後の1806年 (文化3年) の同じ「宗旨御改絵踏帳」では、宣珍の世帯は、男性9人、女性7人の16人に減少し、叔父の家族は含まれるが、名子は女性の2名のみで、家族持ちは記録されていない。これは「宗旨御改絵踏帳」や「宗門改帳」全体の傾向である。家族と世帯の構造変化を背景に、明らかに史料における世帯の表記の仕方が変わっている。

99 自分の配下の村役人も使って相当強引な吟味だったようで、上田家の畑で異仏を拾ったので、上田も心得違いだったという、白木河内に住む助蔵女房きちの告発など個人的な造反が発生している。しかし、領主的な圧力の下で、村として共同体的な反抗はなかった。『上田宣珍日記』文化二年、八月十八日、二十二日と二十三日。

100 鶴島博和著・児島康子翻該・現代語訳「文化二年　白札付書上帳　丑八月　大江村」『潮騒』37 (2022年) 掲載予定。

101 嘉蔵 [116]、上組で洗礼名が寿庵。5月16日に富岡に呼び出されている。

102 弥七 [291] は5月26日に富岡に呼び出しを受けている。上組。同じ上組の幾蔵 [186] [288] [331] は、5月20日、5月24日、5月25日と三度呼び出しを受けている。理由は風邪で出頭しなかったからである。

103 吉村豊雄『潜伏キリシタン村落の事件簿』、p. 203。

104 「作七富岡出勤　大庄屋見習帯刀御免　庄屋見習苗字御免被仰付　明五日御礼=罷出由」(『上田宜珍日記文化二年』

105 島原藩士塚本政直が1823年 (文政6年) に作成した天草島の海辺地勢要図の一つ高浜絵図には、作成した目的が書き込まれている。そこには、「外

国船に対する防衛のためであるが、そこには配置できる藩兵がいないので、百姓と大庄屋・庄屋の防衛力に依存する」とある。大江組の軍事力については、鶴島博和編『肥後国天草郡一町田組・大江組大庄屋松浦家資料集（1）』（刀水書房、2021年）、pp. 24-25。

106　松浦家に残る口伝からの推測で、史料的にはまだ確認できていない。敢えて可能性のみ提示する。

107　磁器の青地の試験も行っている（「作七皿山ゟ帰　青地試宜出来」『上田宣珍日記』文化2年正月五日。

108　1805年（文化2年）の騒動の余韻が残11月16日、亀川村から水主役を入手し（「当村魚運上相済候」：『上田宣珍日記』）、12月16日に陶器の店（陶開屋）を開業し（「陶開屋江焼物持入」）、23日にはお披露目をしている（「陶開屋　店披露案内」）。12月27日には大江大庄屋松浦四郎八が富岡からの帰りに立ち寄っている（大江大庄屋富岡帰懸陶開や江御立寄）。陶開屋では酒も販売も開始していた（「今日（12月17日）ゟ酒売方始る」）。『上田宣珍日記』文化2年。

109　陶石や磁器は大型船を利用して、輸送するが、高浜では沖合での積み替えとなる。上田家は、順宝丸、順幸丸、順福丸の三隻の廻船を所有していた。この前二者、とくに順幸丸は長距離、順福丸は天草灘海域の運搬を担当していたようである。長文化二年の『上田宣珍日記』では、1月14日に順宝丸は肥前に出航している。おそらく陶石を積んでの事であろう。1月26日順福丸が薩摩から帰着した。2月3日には順幸丸が大阪行き荷の積載のため軍ヶ浦に回航した。4月23日には順福丸が富岡に干鰯を積みに廻っている。11月19日と23日に、順福丸は、軍ヶ浦へ焼物と砥石を運び、順幸丸に積み替えている。帰りに荷としてそれぞれ米150表と100表を積んで高浜の浜へ帰着している。100表のうち50表は販売用であった。上田宜珍による海上交通に関しては、別途準備する予定である。

110　宣珍の弟礼作が製陶技術の伝播に五島に出発したのは文化二年だった。

111　「岡郷永代万覚帳」畑中家文書

112　宜珍は、1805年に磁器の研究を進め高浜に店を開く一方で、富岡での八田網を研究し、亀川から水主五人を引き受け高浜の定浦化をめざした。また、1807年（文化4年）6月18日に、村の寄合で、①田畑の生産性を上げるための井出（用水の堰き止め）、②交通路確保のための大河内桑原から徳道峠までの路づくり、③波止場建設のための普請を指示して、夫役を割り振った。これに対して、百姓方の方から、防波堤は受益者である漁方と船方でおこなうべき、という異議がだされた。これに対する、宜珍の説得の論理が興味深い。彼は、「防波堤の普請をしてきたのは、河口が塞がるからだけではなく、洪水のとき水はけがよくなり土手の崩壊もなくなり田畑のためになる。（百姓方にも利益があるのだ）河口が改善されれば他の地域の船や八田網（の鰯船団）も来港するので村全体の利益にもなる。これまで漁方や船方も井出普請をしてきのだから、百姓方も波止場普請を行うべきである。これからは漁師の子孫も百姓になり、百姓も漁師になる可能性もあるのだから、村全体で応分に負担して欲しい」と、村のインフラ整備だから協働して事にあたって欲しい、と説得した。ここにあるのは、天草の他の地域にみられない百姓と漁師間の通婚を前提とした村民の形成と職と身分の分離である。宜珍には、村民を「労働者」とする意識が芽生えていた。その意味で宜珍は先駆的「ブルジョワジー」であった。『上田宣珍日記　文化4年』。

113　檀家の義務が定められ、寺請制度と檀家制度が、キリスト教との対抗関係で生まれた制度あれば、寺を中心とした人々の生活と人生の公式の暦が定められた。4月8日の釈迦の降誕会、釈迦が悟りを開いた12月8日の成道会、釈迦が入滅した2月15日の涅槃会に寺参りすること、説教や仏法を説く寺の集会に参加すること、そして葬儀を寺で行う生活暦に、クリスマス、山上の垂訓、復活祭といったキリスト教徒の暦を思い重ねることは論理の飛躍ではあっても、キリスト教を論駁する中で、寺を中心とした人々の生活と人生の公式の暦が定められたのである。対立の中に既にシンクレティズムの根があった。

114　松浦四郎八を継いだ松浦穀助は、福岡の甘棠館の流れをくむ亀井塾に学んだという。1830年（天保元年）から1858年（安政5年）の間に、大江村では9ないしは10の私塾が存在していた。表6参照。

115　大橋幸泰著『潜伏キリシタン 江戸時代の禁教政策と民衆』（講談社選書メチエ、2014年）。

116　吉村豊雄『潜伏キリシタン村落の事件簿』, pp. 201-203。

117　海老沢有道『日本キリシタン史』（塙書房, 1966; 2004), pp. 1, 11, 14。

118　松田毅一監訳『16・17世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第3巻　1565年～1570年（同朋社、1998年), pp. 361-367; Carta de Irmao Luis Dalmeida pera o padre Dom Belchiot Carnerio Bispo de Nicaea, de Fita aos vinte & duos de Outubro de 1569 in *Cartas que os padres e irmãos da Companhia de Iesus escreuerão dos Reynos de*

Iapão...Desdo Anno de 1549 Até O de 1580, Priemerio tomo (Evora, 1598), pp. 279r-281v.

119　但し、編集本としての史料上の問題もある。「『エヴォラ書簡集』(1598年刊行)なども、転訳の際における誤謬のみならず、教会側の立場から改悪されたり、削除されたりして、原書簡とは著しく改変されたものであることが、埋もれていた原書簡との対校によって明らかにされつつある。」（海老沢有道『日本キリシタン史』、p. 10）。オリジナルとの校閲は次の世代の課題であろう。

120　リアンという洗礼名を、ドン・リアンが、アルメイダが河内浦に来た時に名乗っていたのか、それともアルメイダによる受洗の際に名付けられたのかの断言はできない。手紙の前代の流れからすれば、彼はすでにキリスト教徒であった可能性がある。そうだとすれば、ここでの彼の受洗は堅信礼であろう。

121　regedorは、役職ではなく、権力者、支配者、指導者一般を意味する。

122　tanoarの桶屋を営むという意味から、桶の素材を連想してみた。

123　薩摩守護島津義久、薩州家の島津義虎、そして相良義陽か。

124　松田毅一監訳『16・17世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第3巻　1565年～1570年（同朋社、1998年）, pp. 371-387; Carta de hum home Portugues Cujo nome se nao fabe pera os padres & imaos de companhia de Iesus de Portugal de Iapao aos quinze de Augusto de 1569 in *Cartas que os padres e irmãos da Companhia de Iesus escreuerão dos Reynos de Iapao...Desdo Anno de 1549 Até O de 1580, Priemerio tomo* (Evora, 1598), pp. 281v-287v.

125　筆者はこれまで、河内浦の教会を旧信福寺と推定してきたが、崇円寺敷地内とする。